

< 紙上歴史散策／たきこちゃん・まちづくり通信より抜粋 >

赤目文化遺産

赤目まちづくり委員会

赤目文化遺産 <目次>

◆紙上歴史散策、新・歴史散策紀行

- No.1 隠れた名所「日の谷温泉スタンド」
- No.2 隠れた名所「星川不動滝と溪谷のせせらぎ」
- No.3 隠れた名品「エラール製のピアノ」
- No.4 隠れた名所「丈六ボタル生息地」.
- No.5 隠れた名所「瑞穂の国・田園風景」
- No.6 隠れた名品「和州騒動(わしゅうそうどう)絵図」
- No.7 隠れた名所「竜神山(りゅうじんや)」
- No.8 隠れた名所「柏原城(瀧野城)址跡」
- No.9 隠れた名所「赤目四十八滝・大日滝」
- No.10 隠れた名所「滝川(たきがわ)の清流」
- No.11 隠れた名所「松明調進(たいまつちょうしん)」
- No.12 隠れた名所「延寿院(えんじゅいん)」
- No.13 歴史散策紀行「丈六(じょうろく)を訪ねて」
- No.14 歴史散策紀行「赤目口駅と旅のステーション」
- No.15 歴史散策 遺跡・古墳群琴平山古墳<前編>
- No.16 歴史散策 遺跡・古墳群尻矢・杉屋谷古墳<後編>
- No.17 歴史散策紀行「赤目の米づくり」
- No.18 歴史散策紀行「未来の灯り、赤目の竹」
- No.19 歴史散策紀行「竹(タケ)と滝(タキ)の赤目」
- No.20 歴史散策紀行「山椒魚の話」
- No.21 歴史散策紀行 生命の源「赤目の名水」
- No.22 歴史散策紀行 生命の源 Part2.「伊賀の名水」
- No.23 歴史散策紀行 赤目の産業「製紙と製糸」
- No.24 歴史散策紀行「名張のダムの話」
- No.25 新・歴史散策紀行「観阿弥・世阿弥親子と花伝書」
- No.26 新・歴史散策紀行「名張が生んだ文豪」
- No.27 新・歴史散策紀行「伊賀が生んだ文豪横光利一」
- No.28 新・歴史散策紀行「歴史の宝庫・美旗古墳」
- No.29 新・歴史散策紀行「伊賀が生んだ忍者」
- No.30 新・歴史散策紀行「伊賀の忍者 Part.2」
- No.31 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.1」
- No.32 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.2」
- No.33 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.3」
- No.34 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.4」
- No.35 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.5」
- No.36 新・歴史散策紀行「徒然草の生まれた種生」
- No.37 新・歴史散策紀行「名張のお殿様 藤堂家」
- No.38 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.6」
- No.39 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.7」
- No.40 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.8」
- No.41 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.9」
- No.42 新・歴史散策紀行 俳句の大成者「芭蕉さん」
- No.43 新・歴史散策紀行「荒木又右衛門と鍵屋の辻」
- No.44 新・歴史散策紀行「赤目のむかし話 Part.10」

Vol.1 隠れた名所 「日の谷温泉スタンド」

2007年10月10日にオープンした無料の温泉スタンド(赤目まちづくり委員会運営)で、日の谷橋のたもとに佇む施設。地下200メートルから湧き出し昭和30年代後半に発見されたが、旅館廃業により利用されていなかった日の谷温泉を温泉スタンドとして復活。屋根の下には温泉分析書と2本の

蛇口が24時間いつでも汲めるように無料(志・ところざし)で開放。

泉質…単純放射能冷鉱泉/泉温19℃/湧出量毎分20ℓ 適応性…神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、運動麻痺、打ち身、くじき、慢性消化器病、痔疾、冷え性、病後回復期、疲労回復、健康増進、痛風など。



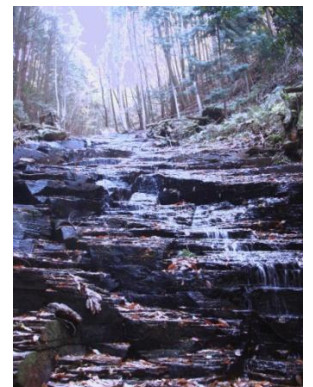
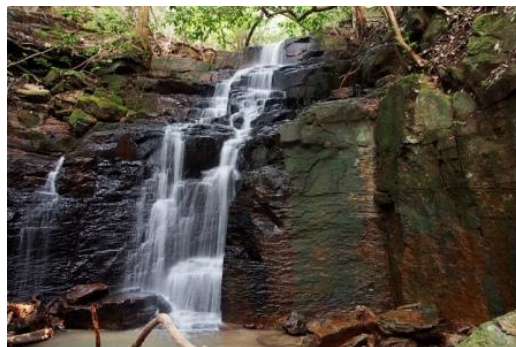
Vol.2 隠れた名所 「星川不動滝と溪谷のせせらぎ」

星川八幡神社より沢沿いに山道を10~15分ほど登った所に落差5mほどの星川不動滝があり、不動明王が岩盤(線刻不動明王座像磨崖仏)に彫られています。炭焼き跡や石切場跡などがあり、結構飽きさせない道になっています。水かさが増すと竜巻滝、七色滝が綺麗に見えて、千枚滝の源流部まで

登って行くと、セツ池(お池)に到着。

まわりの溪流は、杉苔や食虫植物のモウセンゴケの生息地として貴重な自然が残っています。また春先には、メジロや鶯の谷渡りが見られます。

「星川(ほしかわ)」は、昔この川の近くに大きな隕石が落ちた事が地名の由来となっており、その名残なのか至る所に露出した岩があります。

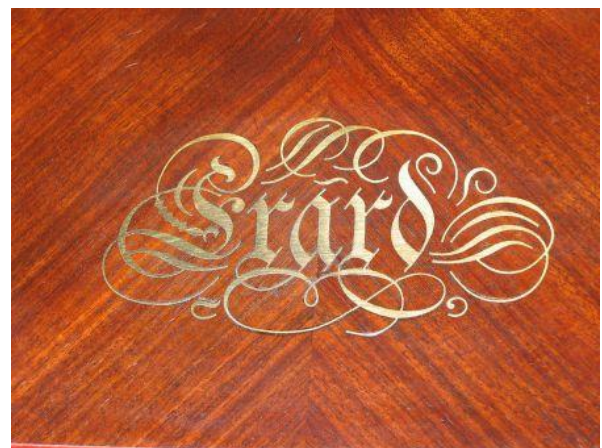


Vol.3 隠れた名品 「エラール製のピアノ」

当センター大会議室には由緒あるフランス「ERALD(エラール)」製のピアノがあります。エラール社(1780~1959)は、1780年にセバスチャン・エラールによって創業、19世紀のフランスを代表するピアノメーカー。歴史的な作曲家(ハイドン、ベートーヴェン、リスト、ショパン、メンデルスゾーン、ヴェルディ、ワーグナーなど)がエラールを所有。18世紀には顧客にマリー・アントワネット王妃も。楽器の特徴は、平行弦で現代ピアノ

のような交差弦ではなく、各音域がそれぞれの音色をクリアに保持できる。時代の流れによりピアノ製造の主流から取り残されていった同社は、1959年にフランスのピアノメーカー・ガヴォー社に吸収され現存しない。この驚きのピアノが、我が赤目市民センターに現存します。

一般使用料1回4時間以内・1,000円(サークル500円/回)



Vol.4 隠れた名所 「丈六ボタル生息地」

赤目四十八滝を原流とする滝川流域一帯は、蛍の生息地として古来より有名です。

地元では通称・丈六ボタル(ゲンジボタル)と呼ばれる。他にヘイケボタル、姫ボタル(キンボタル)などが飛来する。

江戸時代には、名張のホタル数千匹を慶安元年(1648年)江戸表の藤堂高通(当時5歳)に、承応2年(1653年)には、江戸藩邸に献上しています。また昭和30年頃には、大阪道頓堀・戎橋で赤目

の子供たちが取り集めた1万匹のホタルを放飞。

初夏の夜の風物詩、蛍の舞いを眺めながらのんびりと。幻想的で幽玄なホタルの舞い。神秘的な自然のイルミネーションは、眺めているだけで癒されます。

気忙しい日々の喧噪を離れ、ゆったりとした初夏の今宵をお過ごしください。見ごろは、6月上旬の2週間ほどです、お見逃しのない様にしてください。ホタルの生息地の看板が設置されている滝川・垣添橋(柏原)の風景。



Vol.5 隠れた名所 「瑞穂の国・田園風景」

春の田植えの季節に気付くとつい目で追っているのが田んぼの景色。古事記の記述によると、日本は「豊葦原の瑞穂の国（とよあしはらのみずほのくに）」とされている。もちろん言葉のとおり、豊かな広々とした葦原のように、みずみずしく美しい稲穂が実る国。

トラクターが田んぼに入り、田起こしが始まると、冬が終わったことを感じる。若々しい苗が一面に植えられ、水鏡となった田んぼの姿が何とも美しい。これから育っていく苗代の瑞々（みずみず）しい生

命力に満たされた様子を見ていると、なんだか気持ちやすとする。カエルの合唱、野鳥の羽ばたき、ホタルの舞い、全てが自然のオアシス。日に日に背丈が伸びていく稲の成長を見守り、稲穂が重そうにこうべを垂れた黄金田に赤とんぼが舞い飛び時期を迎えると、ああ、日本に生まれてよかったとしみじみ幸せな気持ちになる。

やはり田んぼのある景色は、日本の原風景・赤目の最高の財産だと思う。



Vol.6 隠れた名品 「和州騒動(わしゅうそうどう)絵図」

天誅組(てんちゅうぐみ)の変・乱を描いた絵図「和州騒動(わしゅうそうどう)」(名張市指定文化財)は、幕末の有名な生人形師(いきにんぎょうし)安本亀八(やすもと かめはち)が一ノ井区の福本秀雄氏宅で制作したと伝えられています。

和州騒動の絵は、1863年(文久3年)8月に起こった天誅組の乱の様態を実地見聞により細かく描いたもので、吉野川を中心に高取・竜門・葛城の山々を背景に各藩の布陣地点などが描かれています。

福本氏の先祖が藤堂藩の兵として奈良県・大和五條に滞在していた安本亀八と知己になり、「戦がすんだら、ぜひ伊賀の地へ来られる様」約束をした。翌年約束通りに亀八は、福本家を訪れ離れに1年余り滞在し彫刻や絵画を完成させた。この和州騒動図には、1.五條代官所討ち入り後の天誅組の隊士 2.桜井寺での斬首 3.高取攻めの戦闘描写 4.五條に布陣する津藩陣営での渋谷伊与作の捕縛 5.天誅組残党に間違えられた会津藩士二人と郡山藩兵との戦いの場面などが描かれています。

絵の下方には東光寺(勝手神社の宮寺)に奉納した「三村門人中」と三村塾(寺子屋・柏原)の門下生57名の名前が連記されている。

天誅組の抗争は僅か40日で終わり、明治維新を迎える突破口を切り開いた新撰組や坂本龍馬ほどの話題性や華やかさはないが、平和を謳歌し身勝手な主張ばかりをいう人が多い中、揺るぎない信念と無私の精神・理念に学ぶ処は多い。

参考文献／「生人形師安本亀八」富森盛一著



Vol.7 隠れた名所 「竜神山（りゅうじんやま・高善山）」

高善山【こうぜんやま】（龍神山・りゅうじんやま）は、竜神を祀って有ったので、別名を竜神山ともいう。（標高 466.2 メートル）この竜神山は干ばつの年には、村の人々が降雨祈願のため火上げを行った山である。高い山で火を燃やすとその煙は雲を招き竜神のご加護もあって雨を降らせると信じられていた。「雨降らせたまへ大明神」と叫びつつ山を登り、山上の海神社・祠（竜神さん）へ参拝した。

また四月一日は竜神祭りの日とされ、毎年その日には多くの人々が、豊作の豊穰を祈って海神社へお参りした。山登りも一つの農耕儀礼とされ海神社への参拝は物見遊山を兼ねていて山腹では酒宴が張

られ、横山付近には売店も出て賑やかであったという。

星川七ツ池から徒歩約 10 分で竜神山の山頂に到着する。山頂から柏原方面に進むと、山名の由来である竜神を祀る祠に至る。番人として黒蛇が 2 匹いたという「大岩さん」を経て下って行くとかつて地元産「赤目マツタケ」が有名なマツタケ狩りや石の切り出しなどで人の手が入っていた場所がある。

まさに赤目の自然のシンボル竜神山から琴平山古墳にかけて、昔のように喜びの音がこだまする里山として、自然保護と持続可能な開発が出来たら素晴らしいと思う。



Vol.8 隠れた名所 「柏原城（瀧野城）址跡」

柏原城は、「天正伊賀の乱」終戦の城といわれる。永禄年間(1558 年～1570 年)に滝野貞清によって築かれた土塁、石垣、井戸、堀切、堀などで区画した輪郭式平山城（ひらやまじろ）。1574 年（天正 2 年）に貞清が死去した後は、滝野吉政が継ぐ。

北畠家の養子となった織田信長の次男・織田信雄（のぶかつ）は、1576 年（天正 4 年）北畠一族を暗殺し伊勢の国を掌握した。次は伊賀の領国化を狙っていた。当時伊賀・名張地方は、奈良時代より東大寺の荘園として発展を遂げていたが、鎌倉時代後期にはその勢力が衰え各村ごとの百姓の自治的村落共同体（惣村・そうそん）が進み土豪・地侍が支配する連帯と平等の体制が出来ていた。

1581 年（天正 9 年）の第二次天正伊賀の乱で

は、城主・滝野吉政や百地丹波をはじめ、近在や比自山城から落ち延びてきた土豪・村びとなど 1600 余人で立て籠もり、織田勢 5 万弱に抵抗した（「伊賀乱記」）。当時の伊賀国の人口の三分の一が殺戮され、約一か月間持ちこたえたが最終的には和議に応じて開城。現在も土塁や空堀の遺構が残っており、勝手神社に「天正伊賀乱決戦之地柏原城」と書かれた城址碑があります。

2020 年の 2 月 29 日（土）に NHK 人気番組「ブラタモリ」で、伊賀流忍者の歴史を辿り「柏原城址」が紹介された。神社・仏閣は、全て焼き払われ女子供まで殺戮・虐待された中で、天下人を相手に戦った私たちの先祖が仲良く自治と結束力が強かったことは、称賛に値する。



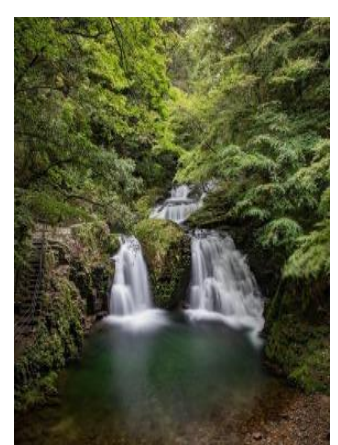
Vol.9 隠れた名所 「赤目四十八滝・大日滝」

いにしえより山岳信仰の聖地であり、奈良時代には修験道の開祖である役行者(えんのぎょうじゃ)役小角(えんのおづぬ)の修行場。地名の「赤目」は、役行者が修行中に赤い目の牛に乗った不動明王が出現したとの言い伝えが由来。また伊賀の忍者の修行場とされている。

赤目四十八滝は、「滝川」の渓谷およそ4kmの道のりに大小さまざまな滝が21か所ほどあり、それぞれの季節で桜、新緑、紅葉、氷瀑と豊かな表情を見せてくれる。地層は、新火山岩に属する石英雲母安山岩で、暗灰色で目は細く柱状節理に形成される。比較的大きな5つの滝を、赤目五瀑(あかめごばく)と云う。・不動滝(ふどうだき) 不動明王にちなんで名付けられた滝。・千手滝(せんじゅだき) 岩を伝って千手のように落水するところからの命名と千手観音に因むとも言われる。・布曳滝(ぬのびきだき) 落差30mの高さから一条の布を掛けたように落ちる全国にある布引滝の中での代表格。・荷担滝(にないだき) 川の中央に位置する大

岩を挟んで流れが二手に分かれる様子が、荷物を綺麗に振り分けて担っているように見える事から、「担いの滝」「荷担い滝」と。・琵琶滝(びわだき) 落差15m、滝と滝つぼを合わせた形状が楽器の琵琶に似ている。

最近特に注目されているのが、『大日滝』この滝は修験道から信仰を集めた大日如来に因んだ滝。遊歩道を外れ急な山を10数分程上がったところにあり、普段立ち入る人も少なく、幻の滝といわれる。滝壺の無いこの滝は真下まで近づくことができ、絹糸のような流れ落ちる滝にそっと身を預け目を閉じ打たれると、滝の水音だけが響く幻想的な空間に、鮮やかな森の木々が癒しを届けマイナスイオンが溢れる。三重テレビの「ええじゃないか。」でチャンカワイ、松島史奈が何度も来訪。名古屋テレビ、ウドちゃんの「旅してゴメン」などで放映。また「平成の名水百選」「日本の滝100」「森林浴の森100選」「遊歩100選」などに選出。まさに赤目四十八滝は、赤目・名張市が誇る名所中の名所です。





Vol.10 隠れた名所 「滝川(たきがわ)の清流」

前号は、まさに瀧自慢であったが、今回は川・水自慢を。赤目を流れる唯一の河川・滝川(12.3km)は、赤目滝から丈六に流れ柏原・木戸口で梶川が合流。ゲンジボタル「丈六ボタル」の生息地としても知られている。

旧村名「滝川村」もこの川に由来。平安時代には、滝川を挟んで中村(丈六・相楽・檀・星川・柏原及び青蓮寺)と矢川(一ノ井と矢川)の2地区に別れていた。そのため川の名称も平安・室町時代は、「矢川」。江戸・明治初期は、「赤目滝川」と称し、明治中期より「滝川」となる。

同じように町名も赤目町になる前は、町村制の施行で明治22年(1889年)4月より名張郡滝川村となったが、明治29年(1896年)には三重県名賀郡滝川村に変更。昭和29年(1954年)市制施行により名張市が発足と共に赤目町となる。

昔から、「水を制するものは国を制す」と言われてきた。戦国時代の武田信玄は、暴れ川を治め、新

田開発することで富国を目指した。滝川下流の柏原区では、水田・稲地は勿論、家庭内に水を取り入れ炊事・洗濯・鮎鯉の飼育など、かつては水車を回し製粉・精米や製紙業(和紙の製造)を発展させた。

特に手すき和紙は、上野地方の特産である和傘の製造に大量に使用され暮らしを潤した。昭和8年には「伊賀傘商工業協同組合」が設立され、上野の町で生産業者125軒、従業員1600人超、年額200万円、全国で1・2位を争い、昭和10年ごろには年間300万本も作られていた。戦後昭和30年以降は、外国から入ってきた「アンブレラ」なる「洋傘」に押されて、伊賀の「番傘」は廃れてしまった。

和傘は、すたれども日本人にとって心豊かな故郷の原形は、いつの時代もお米の美味しい、水のきれいな「赤目」と云えそうだ。



伊賀一ノ井松明講は、奈良東大寺二月堂において毎年3月12日に行われるお水取り行事に、773年以上(2020年・令和2年現在)もの長きにわたり、松明(たいまつ)を送り続けている。3月1日から14日までの2週間にわたって、東大寺二月堂では修二会(しゅにえ・世界遺産登録)、いわゆる「お水取り」が行われる。修二会の正式名称は「十一面悔過(じゅういちめんげか)」と言う。十一面悔過とは、日常に犯しているさまざまな過ちを、二月堂の本尊である十一面観世音菩薩の宝前で、懺悔(ざんげ)することを意味する。天災や疫病や反乱は国家の病気と考えられ、そうした病気を取り除いて、鎮護国家、天下泰安、風雨順時、五穀豊穰、万民快樂など、人々の幸福を願う行事とされた。二月に修する法会という意味をこめて「修二会」と呼ばれるようになった。

行法としてのお水取りは13日の午前2時頃に行われ、その後内陣で韃陀(だったん)の妙法と言う水火の荒行が始まる。荒行に用いる松明は、古来赤目町一ノ井から調進されるのが習わし。宝治3年(1249年)、黒田庄領主の任にあった僧院主・聖玄法眼(しょうげんほうげん)が二月堂の二十七夜行法の松明料として、私領田6段を寄進した。

松明の作成は2月11日に松明講の人びとが朝早くから寺山に入り、樹齢90年から100年の檜(ヒノキ)1本を切り出し、極楽寺境内で約20束の松明に仕上げ、お水取り行事が行われる3月12日に東大寺まで運ばれます。二月堂に納められた松明は、一年間保管・乾燥され、翌年のお水取り行法で使用される。

江戸時代初期の著書「伊水温故」にも、伊賀一ノ井の地に住し、後に若狭の南無観長者と協力し、東大寺二月堂を再興した道観長者の開基になると記されている。長者亡き後はその遺言により、一ノ井の住民達によって引き継がれ、現在に至る。二月堂の「火」と「水」の祭典に際し「火」を送る伊賀と「水」を送る若狭の、古き時代より変わりなく続いている全国でも珍しい行事。昭和63年から、昔のままの経路約35kmを歩いて奉納出来ないかと考え、全工程の3分の1を「昔のままで歩く行事」を復活。2月11日松明のヒノキの切り出しと、3月10日に安全祈願のお渡りが行われ、12日に極楽寺から徒歩で山道を三重と奈良の県境となる峠を超え、笠間地内で「笠間の郷を想う会」のおもてなし朝食を頂き、バスで奈良市内に向かい、午前10時半到着予定。東大寺南大門までは、30分程歩き、二月堂にて松明を奉納します。



Vol.12 隠れた名所 「延寿院(えんじゅいん)」

赤目四十八滝の登り口にある延寿院は、修験者の祖、役小角(えんのおづぬ)が1300年前に開いたといわれ、正式には黄龍山 延寿院という天台宗の寺です。赤目不動を安置しており、この不動尊は東京の目黒不動、目白不動と並んで日本の三大不動の一つに数えられています。他に、鎌倉時代作の石造灯籠と十三重石塔や樹齢約400年以上の枝垂(しだれ)桜は有名。

この桜は高さ7m 幹周り5mのしだれ型で、品種はエドヒガンです。慶長13年(1608年)、植えられたのは藤堂高虎が伊賀に来場され伊賀上野城と領国安堵の祈願所として赤目延寿院を復興された頃だと推定されている。例年四月初旬に花をつけ参拝客を迎えます。やや小型の一重咲きの花が咲き、萼筒(花びらの根元にある『ガク』の形)は壺型。本堂越しに遠くから見ると幹の太さとあいまって日本人好みの盆栽のような趣がある桜です。

役の行者が滝にうたれて秘法を修していたとき、不動明王が赤い目の牛に乗って出現せられたといわれ、後にその不動明王を祀り赤目不動尊として行者の守り本尊とし、今日に至ったものと伝えられ

る。また町名・地名の「赤目」もこれに由来するといわれる。

平安朝から鎌倉時代は、山岳仏教の道場として栄えていた。鎌倉時代より室町、戦国の世にかけて仏教思想の上に阿弥陀の浄土思想が興り、従来の密教思想や龍神信仰と相まって赤目の滝は、滝の数も多く、龍が棲むといわれるくらいの底知れぬ深澤があり、阿弥陀の浄土に生まれようとする浄土思想の実践の場にふさわしい道場であった。

滝も「あみだが滝」と呼ばれており、四十八滝もこの阿弥陀如来48願からつけられたとも言われる。その後、八坊伽藍も後三条天皇勅願により再建されたが、天正伊賀の乱に(伊賀忍者の修練場であったために)織田勢によって灰燼に帰した。わずかに残ったのは、鎌倉時代の石灯籠と菊の紋章入りの巨大な鬼瓦ぐらいである。後に藤堂高次(高虎の嫡男)が不動院観音堂を建て、代々藤堂家の祈願所として明治維新まで庇護されてきた。

是非ともまた桜の咲く頃に、散策に行きたいと思う。



赤目口駅から西へ200m 行って踏切を渡った所に丈六八幡神社がある。神社の主祭神は応神天皇。室町時代の観応元年(1350年)に京都の石清水八幡宮より分社し、現在地に遷座したもの。戦国時代、織田信長による第二次天正伊賀の乱(1581年)で社殿は焼失しましたが、その後神霊を奉じて樗(けやき)の大木の元に祀り、後日社殿を造営し鎮座せられたと由緒書きにある。

境内にはケヤキの巨木が多くあり、中でも社殿向かって左側(拝殿のすぐ右)のケヤキは実測幹周が約6m、樹高41m余り、推定樹齢500年余を越す巨樹です。根の張りが素晴らしく、樹高もあり、腐朽箇所も見当たらず、ケヤキの巨樹の見本のようなです。環境省巨樹データベースには、名張市内でこれより大きい(太い)木は登録されていないので、このケヤキが市内第一の巨木ということになる。

旧初瀬街道に出て、北東に200m行った所に丈六寺がある。創建は、大宝二年(702年)に妙光比丘により開創され、大同年間(806～810年)に空海上人(弘法大師)が大和国へ巡錫(じゅんしゃく)のとき、室生寺建立にあたり室生四門の北門霊地として開創したとされる。

平安時代の永萬元年(1165年)には、斎王好子内親王が伊勢神宮より帰郷の際、当寺に一泊された。ここも天正伊賀の乱で本堂・仁王門・三重塔などのお堂はことごとく灰じんに帰した。また石造五輪塔(名張市指定有形文化財)は、俗に良弁僧正(東大寺・大山寺・石山寺の創建)の供養塔と称され、地輪に「正応4年(1291年)4月」と刻まれているとおり、鎌倉時代の作で、市内の五輪塔では最古のもの。輪の塔は、五輪図形、下から四角形、円形、三角形、半円形、宝珠形を重ねたもので、地、水、火、風、空の五代思想を包蔵した塔婆のこと。真言宗東寺派の寺院で、江戸時代は名張四大寺のひとつとされた。「丈六(じょうろく)」とは、仏像の高さ(背丈)を言い、お釈迦さんの身長が1丈6尺(約4.85m)といわれることから仏像も丈六を基準として造られた。丈六より大きいものを大仏という。お伊勢参りで賑った街道には天保14年(1843年)の道標がある。

今から1319年前の飛鳥時代・文武天皇の時代に、すでにこの地域に「丈六」の地名があり、人々が暮らし・まちづくりをしていたことは、赤目の誇りに値する。



旅立ちと終着の場「駅」。赤目の玄関口・出発駅であり終着駅のステーション、近鉄大阪線「赤目口駅」。1930年（昭和5年）10月10日参宮急行電鉄の榛原～伊賀神戸間開通時に開業。1944年（昭和19年）6月1日会社合併により近畿日本鉄道の駅となった。1945年（昭和20年）7月24日には、米国グラマン戦闘機の機銃掃射を受け、50人死亡113名が重軽傷を負った。死者の中には、出征兵士を見送りに来た多くの子供達も含まれていた。2013年（平成25年）12月21日には終日無人駅化となる。

ちなみに赤目町の人口は、3,537人1,622世帯(2021年2月1日現在)。中世は一円が東大寺領となり、いわゆる黒田庄(荘園)の一部。その後、荘園勢力が衰退して統括的な領主もなく、滝野氏、横山氏など、群小地方豪族の割拠に任せられていた。江戸時代には丈六、長屋(現相楽)は丈六郷、檀、柏原、星川は檀郷、一の井、長坂は矢川郷に属していた。その後明治、大正、昭和と変遷しながら新川、すみれが丘、赤目ヶ丘地区などが新たに誕生した。

赤目口駅に設置された「ふれあい情報館 旅のステーション(旅ステ)」は、8年目を迎える。もともと路線バスを運行する三重交通の切符売り

場だった建物。約30年前に閉鎖後、赤目まちづくり委員会では、2010年に地域ビジョンで駅前の整備も課題として、赤目四十八滝などへ観光客をもてなし、地域の魅力を伝える場所を提供しようと動き始めた。建物は三重交通、土地は近鉄が所有と権利関係が複雑な上、駅前という立地の良さから高額な賃料が想定されるなどの壁が立ち上がった。しかし、亀本会長らが「おもてなしの心でやるボランティアだから」と両社の関係者らを説得。低額で借り受け、2013年11月にオープン。旅ステは4～11月の土日祝日に午前9～午後4時開所し、当番スタッフが観光客に情報提供。夏休み期間には火曜と木曜も開所。

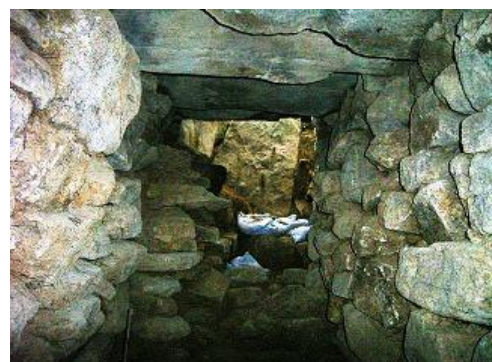
スタッフは「散策サポーター」といい、27人が現在参加。バスを待つ観光客らが座れるようベンチを設置。奈良・東大寺二月堂の修二会(しゅにえ・お水取り)に使う松明(たいまつ)や、特別天然記念物「オオサンショウウオ」の模型(長さ1.5メートル)など。また、地区内の寺社仏閣や古墳など名所21カ所を解説するパネルも展示。観光シーズンを迎え旅のステーションもいよいよ3月27日から開所。赤目のおもてなしの始まりです。



太古の歴史の町、赤目。赤目の里山周辺から森林にかけて、多くの遺跡・古墳群が存在する。縄文・弥生時代に続く古墳築造の隆盛期を「古墳時代」と呼び、現在の日本史では、一般的に3世紀半ばから7世紀頃にかけてとされる先史時代(文献的史料の存在しない時代)。昔から人生30年と云われた縄文人、人間50年と歌われた戦乱の武将の時代、そして今人生90年いな100年時代と云われる現代。考古の時代をふり返ってみると、最も古いのが、赤目町檀の赤目檀遺跡(檀字大垣内)より縄文時代早期の押型文土器と突帯文土器が出土。

また琴平山古墳(ことひらやまこふん・壇横山602)は、名張盆地内で最初に造られた前方後円墳で、最大規模。美旗古墳群よりやや遡る6世紀初頭とされる。横山の丘陵尾根上に立地し、全長約70mの前方後円墳。後円部径約36m、前方部長さ約34m、高さ6m。3段築成で葺石・埴輪を備え、前方部すそ部には埴輪が並ぶ方形区画、くびれ部には大量の須恵器が出土した祭壇らしき跡がある。名張を中心とした豪族で、水田耕作も始めていたとされる。衝角付冑や鉄剣・直刀など、武具や須恵器から

朝鮮半島・百済の関係の深い軍事氏族の首長墓といわれる。(資料展示は、名張市郷土資料館・旧錦生小学校)他にも主な遺跡・古墳は、中戸遺跡(なかのと・相楽字中戸)、二ツ塚古墳群(ふたつづか・相楽字二ツ塚)、梅ノ木遺跡(うめのき・丈六字梅ノ木)、赤目檀遺跡(檀字大垣内)、檀・柏原遺跡(柏原)、沢代遺跡(さわだい・丈六字東)、坂之上遺跡(大字坂之上)、大垣内古墳(おおがいと・檀字前垣内)、横山古墳群(よこやま・檀字横山)、丸尾山古墳群(まるおやま・星川字落シ谷)、石取場古墳群(いしとりば・星川字石取場)、尻矢古墳群(しりや・星川字尻矢)、杉矢谷古墳群(すぎやたに・星川字杉矢谷)、下垣内遺跡(しもがいと・相楽字下垣内)、辻垣内遺跡・古墳群(つじがいと・一ノ井字辻垣内)、上東野遺跡(かみひがしの・柏原字上東野)、春日宮山古墳(かすがみややま・一ノ井字杉之木谷)、桃山古墳(ももやま・丈六字草刈谷)、脇之田遺跡(わきのた・字脇之田)など。赤目地域に20数ヶ所ほど、遺跡・古墳が有りますが、これ以上掘り返したら罰が当たりそうなので続きは、次号をお楽しみに。 参考文献 『名張市史 資料編 考古』



前号から引き続き「遺跡・古墳」の話。赤目の南西部一ノ井から柏原、また南東部(竜神山の山裾) 柏原・檀(赤目が丘) から星川・すみれが丘の山側に掛けて、多くの古墳群が発見されている。特に横山古墳群は、17基が発掘され、横穴式石室8基が見つかった。その代表が琴平山古墳。またすみれが丘造成開発の折りに発見された尻矢(しりや)古墳群は、8基、横穴式石室4・小石石室2基である。その調査の際に尾根の上部で発見されたのが、杉屋谷(すぎやたに)古墳群10基です。

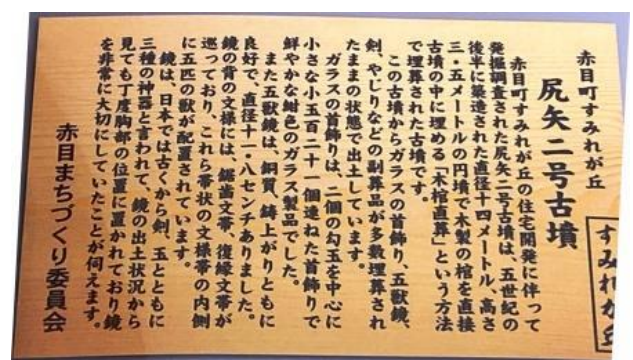
尻矢古墳の主な遺物は、土師器(はじき)、須恵器(すえき)、銅鏡2(四神四獣鏡獣形鏡)、ガラス製勾玉、土玉、管玉、メノウ小玉などが出土。古墳時代の土器は、土師器と須恵器がある。土師器は、弥生時代から続く、赤い色で、焚き火で焼く野焼(のや)きのもので、湯を沸かすのに使用。須恵器は、朝鮮半島から伝わった窯(かま)焼きの技術で焼かれたもの。色は灰色で、キンキンと云う音がし硬い。また、轆轤(ろくろ)の回転を利用して成形し、水などを貯める器とした。

身のまわりの装身具は、首飾りなどの玉類(たまるい)、貝のかたちをまねた腕輪、帯(おび)には

りつける金色の飾り、金色の冠(かんむり)、沓(くつ)といったもの。特に、耳飾りは縄文時代からあって、弥生時代になくなるが、古墳時代に新しい形のものが朝鮮半島から渡来。

すでに弥生時代には稲作が始まり、青銅器や鉄器が伝わり、水利権や収穫した米などをめぐって、村と村の争いも起き始めた。やがて、稲の大量生産などで収穫が増え、自分たちの一族が利益を得よう支配が始まり、貧富や階級の差が出てくる。そして、富を蓄えた身分の高い人は、村人を働かせて豪華な墓を作らせた。これが古墳と呼ばれるお墓。集落が見渡せる見晴らしの良い丘の尾根などに盛り土をして作られ、数多くの人が、鉄器や原始的な道具を使い、長い月日と苦しい労役の末に作り上げたもの。

残念ながら文字のない時代(先史時代)だけに、埋蔵物から推測する以外にないが、縄文文化から開発された食料獲得技術や動植物利用技術、工芸技術は、灌漑(かんがい)水田稲作が大陸よりもたらされ食糧生産が始まった約3000年前の時期・弥生時代以降の長きにわたって維持され、その一部は今日の伝統文化の中にも継承されている。参考文献『名張市史 資料編 考古』



日本のお米は主にジャポニカ米で、約 3,000 年前の縄文時代に大陸から稲作技術とともに伝わった。本来は陸稲（りくとう／おかぼ）で、畑で栽培されるイネ（稲）でした。

赤目でとれる「伊賀米コシヒカリ」は、日本穀物検定協会の食味ランキングで最上位の「特 A」を 7 年間で 6 回受賞。美味しさの秘密は、昼夜の気温差が大きい盆地気候、古琵琶湖層の肥沃な粘質土壌、淀川水系源流の清らかな水など、米作りに適した自然環境です。

春のはじめに、「田起こし」田んぼの土を掘り起こし、細かくして、肥料をまき、土を平らにならす。明治初期までは、一年中水を湛えた「湿田」で、今私たちが目にする田んぼは「乾田」で、秋の稲刈りの前には水がありません。春に深く耕し、土が細かく練り上げられ、地力を向上させ収量を増やす方式。これが明治時代に奨励された田起こしの方式です。

稲はもともと熱帯の作物で、日本の土壌はお米を育てるのに向いていません。しかし、水を溜めるといふ大発明で、すべてを解決。温帯で安定的に栽培できるのも、この発明のお陰です。稲の切り株や刈り草、レンゲなどの有機物を鋤き込み、微生物やミミズなどが分解して養分を作る。これが有機質肥料で中に、窒素・リン酸・カリなどの養分が含まれる。

田んぼ作りの第一歩は、水の確保。「畦（あぜ）塗り」は、田んぼを囲む壁に土を塗り付けて、割れ目や穴を塞ぎ、防水加工をする。モグラやケラが開けた穴から水が漏れるのを防ぎ、養分を含んだ川の水を溜めて、肥料分を供給する。水が漏れると、除草剤や肥料の効果も低下する。

次に「代掻き（しろかき）」で、田起こしが完了した田んぼに水を張って、土をさらに細かく砕き、丁寧にかき混ぜて、表面を平らにする作業。田植えの 4 ～ 5 日前に行い、土を落ち着かせる。均平精度が高いと、田植えの後も苗立ちが均平になり、成長のムラも無く、高品質につながる。

今は JA で苗を購入しますが、苗代田（なわしろだ）で 12～15cm ほどに成長した苗を、田んぼに移植する作業が「田植え」。昔は手で 1 つ 1 つ苗を植える重労働で、現在では田植機を使って等間隔に植える。

ほとんど地産地消ではあるが、機械化が進み赤目の山間部ほど美味しい貴重なお米がとれる。雑草取りや水の管理・草刈など手間暇をかけて、秋には黄金色の実り多い田んぼが広がります。

水田に朝日や夕日が映り込み、綺麗な水鏡の景色は苗が伸びる前の 6 月中旬までが見ごろ。



今、赤目まちづくり委員会では、「赤目竹あかりSDGs プロジェクト」として竹あかりの製作を通じ「竹」の活用に積極的に取り組んでいます。そこで今回は、竹の話しを。

竹の生育域は日本や中国が思い浮かびますが、東南アジアやオーストラリア、中南米、アフリカなどの温暖で湿潤な地域に広く分布し、世界に約 1300 種、日本には約 600 種があると言われる。

竹は木と違って、受精しなくても地下茎から毎年筍(タケノコ)が伸びて生育域を広げます。ところが、六十年とも百二十年とも言われる間に一度、竹が花を咲かせ、竹の花が開花すると、群生している竹が一斉に枯れてしまうと云われる。竹はイネ科の植物で、竹の花も稲穂のような姿をしています。

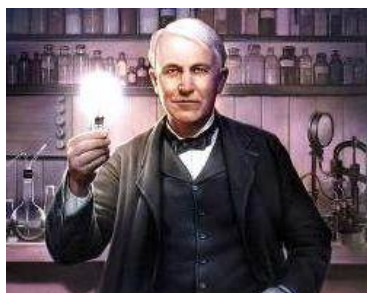
竹取物語をご存知と思いますが、竹から生まれた、かぐや姫はどんどん大きくなり、わずか 3 ヶ月で美しい娘に成長します、これは単なる昔話ではなく実際の竹の生長スピードを表した話。竹の成長はとても早く、3 ヶ月で二十数メートルの高さの親竹と同じ大きさに成長する。また無尽蔵ともいえる竹林に加え、竹の抗菌性や消臭性、癒しの力には無限の可能性を感じる。昔からおにぎりを竹の皮で包んで持ち歩いたり、お肉屋さんの包装材として使われていたのは竹の抗菌性を利用した先人の知恵。消臭性

では、竹を主食とするパンダの糞は無臭です。「竹かんむり」の付く漢字はなんと 83 もあると言われます。昔日本で鉄が不足していた時代には竹筋コンクリートとして鉄筋の代替に利用されていた。竹炭や竹酢液(ちくさくえき)など、また竹布(タケフ)は、竹からできた天然抗菌竹繊維等まだまだ多くの用途が考えられます。

伊賀地方には、竹が多く茂っていたので藤堂高虎が、産業振興として竹を使う和傘の生産を奨励した。赤目の手すき和紙と共にその後伊賀傘は、日本の大半のシェアを占めるに至った。

10月21日は「あかりの日」で、1879年10月21日にエジソンが日本の京都八幡男山の石清水八幡宮の境内に生えていた「真竹」を使って白熱電球を完成させたことが由来。エジソンは云う、「1%のひらめき」に必要なのが「努力」だと。白熱電球の発明で1万回の失敗が続いた時、友人に語った。『一回も失敗なんかしていないよ。うまくゆかない方法を一万も見つけたんだ。』と。

赤目竹あかりSDGsプロジェクトとしても今後、環境問題が問われる中では無尽蔵ともいえる竹林に加え、竹の抗菌性や消臭性など無限の可能性を秘めた天然資源として竹の機能性を活用する取り組みが、持続可能な開発目標となりそうです。



前号の「竹の話」に続き、竹細工・製品の話 少し。プラスチックが安価で量産可能になったため、竹細工品は日常からいつの間にか姿を消していった。茶道や華道をたしなむ若者世代も少なく、高価な花籠や茶道具（茶筌・茶しゃく）なども売れなくなった。

本来竹を加工した製品は、竹ひごを編み込んで細工するなど日用品・農具・漁労具などの「荒物」から、茶道具などの「工芸品」、竹とんぼや和風・水鉄砲・竹かごとといった「玩具」・釣竿等が多い。ひごの編み込み方・編組（籠目）の種類には、基本となる六つ目編み、四つ目編み、ござ目編み、網代（あじろ）編み、さらには、異なる太さのひごを駆使した波網代や、麻の葉編み、松葉編み、やたら編みなど。

素材はマダケ（真竹）が最も多く、伐採したままの青竹、火で炙る（乾式）、苛性ソーダで煮沸したり（湿式）して油抜きをした晒し竹、炭化させた炭化竹、伐採後数ヶ月から数年間自然に枯らしたものの、家屋の屋根裏で数十年間囲炉裏やかまどの煙で燻された煤竹（すすだけ）等がある。これらは弾力性、硬さ、耐久性などが異なり、利用目的によって使い分けられる。青竹は容易に入手できるが、耐久性に問題があり、晒し竹や炭化竹に加工する事でその問題点は改善される。煤竹は独特の色（すす竹色）をしており、硬く、耐久性に富むが、入手は困難である。真竹についてモウソウチク（孟宗竹）も多く用いられる。孟宗竹は、もっぱら青竹のままで利

用される。

日本各地には竹細工品の特産地が多く、中でも大分県の別府竹細工や日田（ひたし）の竹箸などは、真竹の面積・生産量とも全国一のシェアを占め、竹材業者も多いため、加工された素材も入手が容易。また伝統的工芸品に指定されている竹工品は、江戸和竿（東京都）、駿河竹干筋細工（静岡県）、大阪金剛簾（大阪府）、高山茶筌（奈良県）、勝山竹細工（岡山県）、都城大弓（宮崎県）など。

越前竹人形（えちぜんたけにんぎょう）は、福井県の越前地方で竹を使って作った人形で、坂井市とその周辺地域で作った地域団体商標と福井県の郷土工芸品に指定。もともと『越前竹人形』は、1963年に発表された水上勉氏の同名小説で有名になり、小説に感化されて人形作りが盛んになったと云われる。またそれを受けて内田康夫氏の浅見光彦シリーズ『竹人形殺人事件』が書かれるなどミステリーな部分も含んでいる。

近年アンティークな竹細工は、海外の日本ブームにあやかって欧米中心にコレクターが増加し錦鯉・盆栽に継ぐぐらいの流行。そこで素晴らしい工芸品をご紹介します。相楽区の倉坂学氏（環境部会副部長）の作品、微笑ましくホッとさせる傑作。（2021.8/16まで市役所ロビー展示）今後は、竹あかりを始めとして竹細工が本格的になれば、持続可能な発展性を生む経済活動に繋がるのでは。

そして赤目が、『竹（タケ）と滝（タキ）の赤目』と呼ばれる日が来るのでは…。



赤目四十八滝の「日本サンショウウオセンター」では、赤目生まれの山椒魚を含め国内産9種約50余匹が展示されている。滝川に住む世界最大級の両生類「山椒魚」は、魚ではなく、カエルやイモリの仲間。「生きている化石」と呼ばれる稀少動物で、特別天然記念物に指定。3月末に営業を休止した水族館「志摩マリナランド」（志摩市）の雄3匹、もとは川上ダムの保護池で誕生した日本固有種も仲間入り。江戸時代、長崎商館の医師シーボルトは鈴鹿の山でオオサンショウウオを手に入れて祖国オランダに持ち帰り、ヨーロッパで紹介し世界的に知られるようになる。この通信の題名「たきこちゃん」も、赤目の山椒魚のイラスト・キャラクターです。

「山椒魚(サンショウウオ)」の名の由来は、一説に、山椒のような香りがすることによる。平安時代以前からの古称に「はじかみいを」があり、これは、「山椒(はじかみ)魚(いを)」の意味。また、「ハンザキ」の異称がある。由来として「からだを半分に裂いても生きていそうな動物だから」「からだを半分に裂けているような大きな口の動物だから」など言われる。ほかに体表の模様が花柄のようにも見えるので「花咲き」から転訛した、といった説も。今は捕獲して食することは禁じられているが、天然記念物の指定を受けるまでは、貴重な蛋白源で食用

とした地域も多い。北大路魯山人(きたおおじろさんじん)の著作『魯山人味道』によると、さばいた際に強い山椒の香りが家中に立ち込め、最初は堅かったが、数時間煮続けると柔らかくなり、香りも抜けて非常に美味であったという。また、白土三平・劇画『カムイ外伝』でも食用とする場面が見られる。

井伏鱒二の代表作『山椒魚』は、主人公の山椒魚が岩屋に迷いこんできた一匹のカエルを閉じ込め、悲しく、どこかおかしい幽閉生活の物語。蛙は空腹でもう動けない、駄目のようだ、と言う。山椒魚は何を考えているか、と尋ねる。「今でもべつにお前のことをおこっちはいないんだ。」の蛙のセリフで物語は終わる。現代風にとらえると、「主人公は引きこもり」また「いじめ」とも考えられる。初めは現状から抜け出す努力をするが、それがうまくいかないと解ると…出口のない悩みを抱える。

考え次第では、コロナ禍で絶望状態にも光明は差す。そのような励ましをこの短編小説から受け止められる。まだ青森中学校1年生だった太宰は、兄が東京から持ち帰った同人雑誌を読んで「山椒魚(幽閉)」に感動。その後、井伏鱒二と太宰治は師弟の関係になった。井伏がいなければ、作家「太宰治」も名作『人間失格』・『走れメロス』も生まれなかったと言っても過言ではない。



赤目は、「平成の名水百選」に選ばれた水のきれいな地域。「名水百選」は、昭和60年、環境庁によって、全国の河川や地下水・湧水の中から「昭和の名水百選」として100ヶ所認定される事から始まった。その後新たに「平成の名水百選」が加わり三重県下は3か所で、わが赤目四十八滝は、平成の「名水」にみごと認定された。

地球は約46億年前に誕生したといわれ、はじめから水があったわけではない。誕生してから数億年の地球は岩石の塊で、水のもとになる水素や酸素も岩石の中に閉じ込められていた。この岩石が地殻の熱で溶かされ、遊離し水素と酸素が結合して水ができた。まさに水は、地球のいのち（地水火風空・五大）の根源そのものと云える。

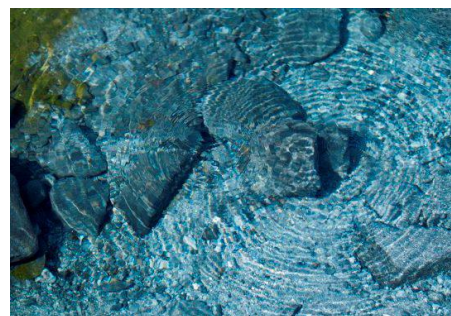
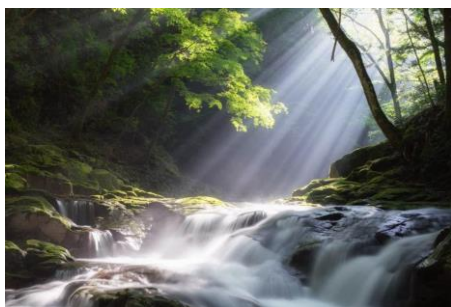
「湧水（わきみず）」とは、地下水が自然の状態地表に出てきたもの。地球上の水は、蒸発、凝固、降水・降雪、浸透、流出といったプロセスで循環し、山々に降った雨水や雪解け水は、そのまま地表を流れていくが、多くは地中へと浸透する。この地下水が地上へと流出したものが、「湧水」で、地質・地形がいくつかの条件を満たすことで発生。例えば、台地や段丘、扇状地などで地形面と地下水面が交差する場所や火山山麓など岩盤の割れ目のある場所、また鍾乳洞の入り口などが発生しやすい。地下水は目で見ることはできないが、湧水を調べることで、地下全体の状況を推し量ることができる。表層水と

比べて外部から影響を受けにくく、良質で安定しているという特徴がある。「湧水」は、簡易水道の水源として、冷やし水など、また、古くは人々が野菜を洗ったり、お米を研いだり、洗濯をしたりと、生活用水として使われてきた。

赤目四十八滝の入り口には、「じゃんじゃの水」という湧水が出ている。その昔、伊賀流忍者百地三太夫などが修行のとき、身を清め、心を鎮めたとされている。豊富な湧水（じゃんじゃん出ている）と行者が持つ錫杖（しゃくじょう）の音に似ているのでそう呼ばれる。また、周辺にはオオサンショウウオやアユ、ホタルなどといった清流にしか生息しない貴重な生き物や植物が多く見られる。しかしながら『流れない水は腐る』と云われる様に、流れが止まれば腐敗する。『淀む水にゴミ溜まる』とも。

美しく輝く水面、せせらぎの音、そこに生息する動植物—豊かな名水は人々の心に安らぎを与えてくれる存在。水遊びに訪れる子ども達や、散策を楽しむ人の姿も多く見られ、また、洗濯や料理のために人が水場に集まることで、井戸端会議・会話が生まれ、地域のコミュニティが生まれる。赤目は、景勝地として知られ、遠方からも大勢の人が観光に訪れる。

私たちが次世代へと受け継いでいかなければならない「赤目の名水」は、貴重な遺産です。



赤目の名水に続いて、「伊賀の名水」と「食」の話。名張には、名張川をはじめ宇陀川、青蓮寺川、滝川、小波田川、シャククリ（シャクリ）川等多くの川が流れている。また、新田用水や名張地区の城下川（築瀬水路）、平尾用水などが張り巡らされている。古来より名張の人たちは、川とともに数々の歴史を刻み、そして、生活用水・農業用水・交通・産業として恩恵を受け、時には水害などの被害を受けながら、水と共に暮らしてきた。また、景勝地としての赤目四十八滝・香落溪・青蓮寺、比奈知の2つのダム湖を抱え、まさに名張は「水のまち」と言える。

また、その地ならではの地酒や豆腐、お菓子といった特産品にも、名水は欠かすことができない存在。テレビコマーシャルで一躍有名なサンガリアのミネラルたっぷり「伊賀の天然強炭酸水」は、鈴鹿山脈、信楽山地、布引山地の花崗岩層（かこうがんそう）から自然ろ過で育まれた伊賀盆地独自の名水・天然水（硬度 10 ~ 30mg/L の軟水）に炭酸を注入した炭酸水。ミネラル分のシリカにはコラーゲンやエラスチンなどの繊維や組織を強力につなぎ合わせる働きがある。シリカ（ケイ素）を多く摂取している人は、そうでない人に比べ骨密度が高く、骨や歯、爪、髪の毛などの強度を保つ上で欠かせない。

昔から伊賀地方で親しまれてきた伝統銘菓『丁稚ようかん』。水ようかんと聞くと夏のお菓子ですが、伊賀地方では「冬のお菓子」として知られている。

水ようかんより甘さが控えめで、舌触りと口解け感がよく、みずみずしい伊賀の丁稚ようかんは、蒸し羊羹と違い日持ちがしないため、冷蔵庫がなかった昔は夏場は作っておらず、冬季限定のお菓子だった。10月に入ると新小豆（あずき）が収穫されて味も香りもさらに美味しく味わえる。アンが一番美味しい旬の時期に作っていたから、寒い冬に暖かい部屋でよく冷えた丁稚ようかんを頂くのが、元々の伊賀の食べ方だとか。名張でアズキと云えば、賛急屋さんの「名張饅頭」。赤目は、たまきやさんの「へこきまんじゅう」。

また夏は、伊賀の芭蕉に縁の深い水都・岐阜大垣発祥の「水まんじゅう」。伊賀地域は関西淀川三川のひとつ、木津川源流の里、清流の輝きが込められた逸品。特に最上級の国産葛を使ったもので、中に忍ばせたこしアンは、どこまでもトロリと葛の喉ごしや口さわりが良く。広く文人墨客の方々に人気の逸品。豆腐田楽も有名で、豆腐は伊賀産の木綿豆腐を使用し、切った豆腐を手作りの竹串に刺し、両面素焼きにした後、伊賀独自の玉味噌と木の芽を合わせた味噌を塗って焼く、春の訪れを感じる伊賀のおもてなしの料理。

日本ではかつて「水と安全はタダ」と言われ、水は非常に安価または無料だとされていたが、今はお金を払ってでも欲しいものが、「水と安全」である。



赤目を支えた産業として、「製紙業」手漉き和紙作りは今までも記述した通り有名。奈良県吉野地方から伝えられ江戸時代中期(宝暦年間 1751 年頃)から作られていたが、柏原区の森垣亀次郎氏が推進者となり、明治から昭和初期に紙の需要が著しく増え赤目町一帯は一大生産地に。滝川の水を利用して柏原・長坂地区で盛んに生産された。和紙作りは、農閑期の冬の仕事で、材料の楮(こうぞ)の皮を、寒中の澄み切った水にさらすのが良い紙作りの秘訣。楮はクワ科の落葉低木で、栽培が容易で毎年収穫できる優れもの。紙漉きには、綺麗な水が必要で適した土地柄であった。また、丈夫な和紙は柿渋や寒天・コンニャクノリなどで加工すると更に丈夫になり、耐水性も向上する事から傘や笠、合羽などの雨具に利用され、伊賀の番傘が生まれた。

そしてもう一つの「製糸」。シルク(絹)は、蚕(かいこ)がつくる繭(まゆ・繊維)から得られ、直径2~3cmの繭からは約1,500mもの長い糸を作ることができる。そして蚕糸(さんし)業は、蚕の卵を生産する「蚕種(さんしゅ)業」、蚕を育てる「養蚕(ようさん)業」、繭から糸をとって生糸にする「製糸(せいし)業」に分かれる。明治時代には、養蚕に使う蚕の卵の保存に使用された洞窟、赤目風穴(ふうけつ)があった。風穴の上に建てられた「風穴小屋」は、全国に280カ所ほどあり、当時の名賀郡瀧川村にあった貫誠館は、館主の濱地佐太郎氏(相楽)によって明治42年に創業され

た蚕種製造所。濱地は、一代交雑種と呼ばれるF-1種の有利を説いた。また、浸酸孵化法を研究し、最盛時は年間一万枚ほどの蚕種を生産。養蚕先覚者について、「名張市史」には、天保十二年に柏原に生まれ、江戸末期に長野県南安曇地区に行き養蚕技術を習得し、帰郷して飼育をはじめた大西利右衛門の名を挙げている。江戸時代までは、蚕は春の孵化から6月末の産卵まで、1年に1度の飼育しかできなかった。しかし桑の葉の芽吹きに合わせて、卵を火鉢で暖めたり、冷たい所に置いたりして、慎重に温度管理を行い孵化の時期を調整していた。そして大正時代には、養蚕の技術が著しく進歩し、F1品種の実用化、風穴蚕種の秋蚕種、初冬蚕期まで飼育期間が広がり、蚕室は養蚕が営めるよう炉が掘られ、棚飼いの棚は柱から柱まで約一間としていた。

赤目には、蚕の餌となる桑畑が点在していて、学校帰りに桑の実を食べた思い出がある。今も一の井区の養蚕飼育所の屋根瓦には、「蚕」の字が残っている。製糸業では、丈六の上坂内科の裏に、今は空地だが昭和30年代までは金糸工場があり多くの人が勤めていた。シルク・絹は古代から貴重な高級品で「人の皮膚と同じタンパク質でできている」ことから、肌にやさしく着心地が良いとされ、明治・大正期には、日本の輸出高は世界一であった。このジャパニーズ・シルクの名残が赤目にもある。

(参考資料:「柏原の昔話」富森盛一著、「名張の歴史」中貞夫著)



まちづくり委員会で2021年12月に近郊のダム見学を実施しました。そこでダムのお話を少し。名張市では、青蓮寺ダム・比奈知ダムが、そして隣の宇陀市には、室生ダム。伊賀市には、川上ダムが出来ました。伊賀地方は、ほんとうに水に恵まれた地域です。日本には、約3,000箇所のダムがあります。基礎地盤から堤頂までの高さが15メートル以上のものをダムと呼び、それ以下は堰(せき)として扱われます。

まずは、〈青蓮寺ダム〉

青蓮寺ダムが、いちばん古く建設以来50年。堤高82.0m、堤頂長275.0m、貯水量2,720万 m^3 のアーチ式コンクリートダムというタイプの多目的ダムです。もっと細かい分類だと中央越流型非対称放物線不等厚アーチダムという日本に1、2例しかない珍しいものです。アーチ式コンクリートダムは美しく弧を描く堤体(ていたい)を見ることが出来るダムで、青蓮寺ダムも巨大なアーチの堤体を見ることが出来ます。

天端の道路は車一台がやっとの狭い道路で、途中で対向車とすれ違ったら大変。また青蓮寺ダム湖にかかる橋は、青い橋が「青蓮寺橋」、赤い橋が「弁天橋」です。それぞれの橋が湖に映える造形美が素晴らしい。今回8人用モノレールで堤体下部まで下りて、放流ゲート口を見上げる事が出来ました。

そして、〈比奈知ダム〉

比奈知ダムは、重力式コンクリートダムで建設以来23年、高さは70.5m、堤頂長355.0m、貯水量1,840万 m^3 。ダム特有の美しい曲線は見られないが高さは十分あり、洋風のお城の城壁のような素敵な堤体で見応えがあります。ダムの下にある比奈知ダム親水公園は、水遊びにまた六月にはホテルが乱舞する。名張川・木津川・淀川流域の洪水調節、流域既得用水の補給として不特定利水、京都府・奈良市・名張市への上水道供給、中部電力の小規模水力発電(1,800kW)を目的とした多目的ダムです。

今回は、特別に監査廊(かんさろう)・堤体内部、通廊(階段)・エレベータを利用して入れて頂きました。階段を下りてポンプ室・発電室も見学。(要事前予約)「本当にありがとうございました。」

多目的ダムは、その利用目的として1. 治水・灌漑の水・環境保全 2. 災害防止のための河川の水量コントロール 3. 利水・上水道としての利用 4. 電力発電などの用途があります。多くの年月と費用をかけて作ったコンクリートの塊(ダム)もコンクリートの耐久年数がおおよそ100年と云われ、今後の利活用に問題を残すものの、私たちの現在の生活を維持するために、また風水害に対する「安心と安全を守る」必要不可欠な存在です。



今回より赤目を飛び出して、伊賀・名張の歴史散策を。名張と云えば、江戸川乱歩と観阿弥・世阿弥の親子が有名。そこで今回、能楽の大成者・世阿弥親子のお話を。

世阿弥元清（ぜあみもときよ、芸名世阿彌陀佛、正平 18 年(1363 年)～ 嘉吉 3 年 8 月 8 日(1443 年 9 月 1 日))は、室町時代初期の大和猿楽結崎座の猿楽師。父の観阿弥清次（かんあみきよづく、芸名観阿彌陀佛 1333 年～ 1384 年・伊賀上野生れ）・能楽者で、伊賀国小波多（現・名張市小波田）で創座。観阿弥親子の能は、現代も「観世流」として受け継がれている。(wiki より)

父・観阿弥は、幼い頃から大和に出て申楽の道に入り芸を極め、その後、妻の出生地である名張市小波田で、初めて猿楽座（後の観世座）を建てた。能楽にゆかりの名張では、宇流富志禰神社（平尾）に、能・狂言面 45 点（県指定有形文化財）が所蔵されている。この面は、室町中期から江戸期に作られた。世阿弥の作品は『高砂』『井筒』『実盛』など 50 曲近くあり、現在も当時のまま能舞台上で上演される完成度の高い演目。

ユネスコ世界無形文化遺産に認定された能楽は、世界に誇れる日本の伝統芸能。能楽とは、「能」と「狂言」を合わせた舞台上、まさに幽玄とわびさびの芸術。能は、古典文学や同時代の出来事をもとにした歌舞劇。狂言は、日常の滑稽な部分を題材にした喜劇。能のもとには田楽、猿楽で、農民たちが田植

えや収穫祭の時に笛や太鼓で歌い踊った舞から高められた。世阿弥は、容姿と才能に恵まれ、時の権力者・三代将軍足利義満の庇護を受け役者の才能を開花させた。

また書籍『風姿花伝（ふうしかでん）』（花伝書・かでんしょ）は、21 種の伝書のうち最初の著作。芸論も史料価値だけでなく、文学的価値も高い。亡父の教えを基に、能の修行法・心得・演技論・演出論・歴史・能の美学など、世阿弥自身が南北朝から室町初期にかけて、会得した芸道の視点からの解釈を加えた一子相伝の秘伝書。花伝書の「初心忘るべからず」とは。「初心」とは、初々しいという意味ではなく、若い時期の未熟さを指す。未熟な芸を忘れずに、身体に記憶させておけば、芸が下がることはない。また「花」という言葉を、人気、技能、美、栄光など様々な意味で用いる。現代人も、「彼には花がある」「彼女は花のようだ」などと表現する。その「花」を咲かせるには、運命に身をまかせるのではなく、絶え間ない努力をするしかない。時が経つに連れ夢が変わっても、果てしない道を歩み続けること自体が、今を生きる老若男女がたとえ老いても「花」ではないかと。

晩年、世阿弥も佐渡流罪など、不遇な波瀾万丈の生涯を送った。しかし室町時代に大和と伊勢・名張など初瀬街道を往来して、赤目の風景を見て思考していたに違いない。（参考資料:「風姿花伝」水野聡訳）



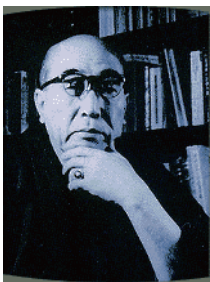
名張と云えば、江戸川乱歩の生誕地。日本の探偵小説(推理小説)を創始した作家で、明治27年(1894年)名張で生まれた。2歳の頃父の転勤に伴い転居したせいで、乱歩にとって名張は「見知らぬふるさと」であり続けたが、晩年になって名張の地を踏む。乱歩の生誕碑は、名張市新町の榎田医院の庭にある。乱歩が57年ぶりに名張を訪れた際、彼の出産を手伝った老女に会って初めて生誕地を知る。これをきっかけに、昭和30年(1955年)に名張市民の手で「江戸川乱歩生誕地」碑が建立。また、名張駅前には江戸川乱歩の銅像がある。

明治27年10月21日、当時の名賀郡役所の書記であった平井繁男の長男(本名・平井太郎)として、名張に誕生。父の転勤で鈴鹿郡亀山町(現亀山市)、翌年名古屋市に移る(以降、大人になっても引越しを繰り返し、生涯で46回引っ越した)。大正五年(1916年)早稲田大学を卒業、同十二年処女作「二銭銅貨」を発表。ペンネームは、米国小説家のエドガー・アラン・ポーのもじり。以来多くの傑作を生み、日本近代探偵小説を創始しその分野を確立した。大正から昭和期にかけて活躍し、主に推理小説を得意とした。1931年(昭和6年)5月、乱歩初の『江戸川乱歩全集』全13巻が平凡社より刊行開始された。総計約24万部の売り上げを記録し、経営の行き詰まっていた平凡社を建て直すきっかけとなった。

特に少年向けとして1936年に発表した、明智小五郎と小林少年や少年探偵団が活躍する『怪人二十面相』は、子供達から圧倒的な人気を得てテレビ化・シリーズ化され、いまでも多くの読者に読み継がれている短編小説で読みやすい作品。

日本国外の推理作家との交流も積極的で、エラリー・クイーンと文通してアメリカ探偵作家クラブ(MWA)の会員にもなったほか、各国の推理小説事情を日本に紹介。1954年、江戸川乱歩の寄付を基金として、日本推理作家協会(旧:日本探偵作家クラブ)により、探偵小説を奨励するために制定された文学賞「江戸川乱歩賞」が設けられた。現在では推理作家への登竜門として知られる。

また文豪・田山花袋(たやまかたい)の「名張乙女」には、「伊賀の国、名張の町、--このようにやさしい娘の多い町は、何んなに平和に、何んなにすぐれた処でせうか。」(原文ママ)と名張・伊賀を称賛。田山花袋は、大の旅行好きで作家活動の傍ら日本中をくまなく旅している。名張をことのほか好いたようで、彼が「名張」に抱いた浅からぬ愛情を小説「名張少女(なばりおとめ)」を通して象徴。名前は「お園」19歳。島ヶ原の料亭で仲居をつとめるうら若く、純情で優しい少女。「名張おとめ」はこの女性に由来しています。今宵も「名張乙女」を片手に故郷を愛でたいものだ。そして故郷を誇りに思える人が大いに育てて欲しいと思う。



誰にも生まれた故郷がある。幼少期・小年期を過ごした環境が、後々に大きな滋養と成って影響を及ぼすことが大きい。また心の拠り所とするのも、育った原風景なのかも知れない。それらは「郷愁を呼ぶ風景」であり、懐かしさの感情と愛着を感じることが多い。そこで伊賀(名張)に愛着を感じた人たちを紹介。

横光利一(よこみつ りいち、1898年〈明治31年〉3月17日 - 1947年〈昭和22年〉12月30日48歳没、本名・としかず)は、明治31年(1898年)に、福島県会津若松市で父・梅次郎と母・こぎくの長男として生まれた。母は、松尾芭蕉の家系をひくといわれる。明治37年(1904年)6月、父が軍事鉄道敷設工事のため朝鮮へ渡り、母の故郷である三重県阿山郡東柘植村(現・伊賀市野村)に戻り、小学校1年から4年までの多感な少年時代の大半を過ごした。伊賀市野村の母の実家・向かいの梅田竹次郎さん屋敷2階に住んでいた。

短編「笑はれた子」に書いた跳ね釣瓶(つるべ)は、「この家の井戸の物だろう」と推測されることから「横光利一の心のふるさと公園・跳ね釣瓶(つるべ)の庭」と名付けられた。跳ね釣瓶は支柱に上下に動く横木を渡し、井戸側に釣瓶を、反対側に重しを付けて、この原理で力仕事が軽減されるという仕組み。

親友故・澤井善一氏に宛てた手紙で、「やはり故郷と云えば柘植より頭に浮かんで来ません」と柘植

への慕情を記している。利一が小学校5年生以降柘植に帰らなかったことについて「好きなればこそ帰れないという苦しさ、これは文人ならではの分かれぬことです」と俳聖松尾芭蕉の心情や柘植への郷愁を記している。

明治42年(1909年)に滋賀県へ移りますが、明治44年(1911年)13歳で三重県第三中学校(現・三重県立上野高等学校)へ入学。一家揃って上野町万町に移り住んだ。庭に大きな柿の木があり、試験になると「此処で勉強するとよく出来る」と言ってその木に登り、本ばかり読んでいた。後、大正12年小説家として文壇にデビュー、川端康成と共に新感覚派運動を展開。志賀直哉とともに「小説の神様」とも称された。

柘植と云えばもうひとり、日本で最も有名な俳聖・松尾芭蕉。1644年(正保元年)に伊賀で誕生し、伊賀市上野赤坂町とも伊賀市柘植(つげ)町とも云われる。生誕地の上柘植村(現・伊賀市柘植町)とする説は、松尾家は芭蕉生誕と前後して伊賀上野城下の赤坂へと転居しているため、上柘植村で生誕の可能性もある。

ちなみに多くの文人が愛した伊賀の地は、盆地で山に囲われ自然が豊富で、しかも温厚で・人のいい人たちの集まりの場といっても良いだろう。その中でも彼(芭蕉)が常に忘れなかったこと、それは、「故郷と、人を思う」ことだ。



今流行の歴史好きの「歴女(れきじょ)」の中でも、古代史のロマンを感じられる遺跡「古墳」が好きな女性のことを、「古墳女子(こふんじょし)」と言う。そこで人気の古墳の話を。

赤目にも多くの古墳群が存在するが、名張で有名なのが「美旗古墳群」。名張川支流小波田川上流右岸に広がる標高200mの台地に位置する古墳群で、古墳時代の前期から後期に築造された。伊賀氏または名張氏族のものとも推測され、伊賀地方で最大規模。「馬塚」、「殿塚」、「女良塚(じょうろうづか)」、「毘沙門塚(びしゃもんづか)」、「貴人塚」の5基の前方後円墳(前方部の長さと同幅が後円部の直径を超えない帆立貝式古墳)の他、方墳の「小塚(こづか)」と円墳の「赤井塚」など、大小7基の古墳が現在し、「カブト塚」・「矢羽塚(やばづか)」・「玉塚」などの方墳と円墳の多くは消滅した。

中でも、●馬塚は、全長約142mの最も大きな前方後円墳で、近鉄美旗駅の南側に位置する。円筒埴輪のほか家形埴輪や蓋形埴輪が出土、往時の栄華が偲ばれる。●殿塚は、台地の北西の端部に位置する、美旗古墳群では最初に築造され全長約92m。墳丘は、全面に葦石で覆われ、形象埴輪や、円筒埴輪の破片が出土。4世紀末前後の築造。●女良塚は、殿塚の南西約200mに位置し、全長約100m。墳丘は、後円部三段築成前方部二段築成で、全面葦石で覆っている。墳丘からは黒班を持つ円筒埴輪や家形埴輪(名張市教育委員会所蔵)が出土。●毘沙門塚は、女郎塚の西約350mに位置し全長約65

m。竪穴式石室で、176cm、幅23cm、厚さ8cmの木板が出土。●貴人塚は、全長約55m。6世紀初頭の築造。●小塚は、馬塚の東約50mに位置する方墳で、一辺15m、高さ3.5m。現状は竹藪だが、近年まで畑として耕作されていた。●赤井塚は、貴人塚の南約1.5kmの丘陵地に位置する円墳。現存規模は直径22m、高さ8.5m、周囲が畑の耕作で削られて本来直径が30m前後あったと考えられる。石室を構築する石材は一辺2m前後の大きな変磨花崗岩。●矢羽塚は、毘沙門塚の東約75mに位置する。現状は水路や水田、農道で削られ封土の一部を残すにすぎない、葦石の一部や埴輪片が確認。●玉塚は、馬塚の南西約100mに位置したが、宅地造成で消滅。周囲に幅10mの濠が確認されている。

地元では、馬を埋めた墓を「馬塚」、奥方様を埋めた墓を「女郎塚」、男女の家来たちを埋めた墓を「殿塚」「貴人塚」、子供を埋めた墓を「小塚」と。持っていた宝物を埋めた所を「玉塚」、仏像の毘沙門天を埋めた所を「毘沙門塚」と、伝わっている。

美旗は、かつて美濃原や小波田野と呼ばれ、この地名を合体させたのが「美旗」。古事記や日本書紀にも天皇の禁猟区として原野があったと記述。室町時代には能楽の観阿弥が創座した福田神社跡、天正伊賀の乱の滝川氏城跡、また近世・約360年前に開発された新田水路や初瀬街道宿場町の街並みなど数多くの史跡が残る名張の歴史の宝庫。

参考文献『名張市史 資料編 考古』



伊賀・名張を語るのに忘れてならないのが、忍者の存在。忍び(しのび)の存在は、「秘(ひ)して秘すべし」が基本。赤目四十八滝は、忍者(修験道)の修業の場と云われる。

ちなみに歴史解釈・認識に大事なことは、歴史的史実(歴史上の事実)があったか、否か。其の文献があるか、論理性・道理が通っているか、現在に残る遺跡・遺品が存在するかが、判断基準とされる。得てして「歴史というのは勝者が伝えるもので、真実は塗り替えられる。」と云われ、道理にかなわなくても勝った者が正義となり、負けた者には不正の汚名がきせられる、勝敗によって正邪善悪が定まり、成功者には、その過程に不正があっても不問にされる。ここでは極力歴史的史実に則って、記述したいと常々思う。しかし今回の話は、残念ながら相手が忍者だけに、雲隠れされそうなので、伝承事も含めた散策としたい。

唯一伊賀忍者には、女性忍者「くノ一(くのいち)」がいたと、また伊賀忍者に、「あかめ」と呼ばれるくノ一がいたという。なお専門的なことは、三重大学の国際忍者研究センターにお任せしたい。

伊賀流忍者は、上忍三家と云われる百地三太夫(ももちさんだゆう)・百地丹波(ももち たんば)、服部半蔵(2代目・服部正成(まさなり/まさしげ)、藤林長門守(ふじばやしながとのかみ)の御三家。名張ゆかりの百地三太夫は架空の人物と見る向きも多いが、資料によると三太夫は1571年に百地

清右衛門の子として伊賀国名張中村に生まれた実在の人物。天正伊賀の乱以前は名張竜口に住んでいたが、乱の前に伊賀喰代(ほおじろ)へ伯父の百地丹波と移ったという。記録に見る限り、天正伊賀の乱で国人のリーダー的存在となった人物は三太夫ではなく、丹波と思われる。なぜなら当時三太夫はまだ十歳だったからである。「百地」は「ももち」と読むのが普通だが、地元では「ももし」と読む。また百地三太夫・丹波共に、世襲制の名前であったとも。三太夫は、安土桃山時代に名を馳せた盗賊・石川五右衛門や、真田十勇士の1人である霧隠才蔵の師匠としてマンガでは描かれている。忍者は、常に歌舞伎や漫画のヒーローでした。

天正伊賀の乱は柏原城を開城して終結したが、三太夫を含む百地丹波守以下百名ほどは高野山に下り、やがて紀州根来の里に定着し、根来忍者に、また百地三太夫はこれをもって歴史から消える。百地家は、服部家・藤林家とも関係があり、服部半蔵正成の兄は、紀州に隠棲していた百地丹波の子・保武を呼んで伊賀藩士に取り立て、伊賀の名門藤林家を再興させる。そして藤林保武が後に忍術書の最高峰「萬川集海(ばんせんしゅうかい)」を著す。紀州に残った弟の正武も忍術新楠流の開祖となり、「正忍記」を著す。

つまり、忍術秘伝書の二書は、どちらも伊賀が生んだ百地丹波の子によって完成された。これこそまさに忍びの秘伝である。



前号に引き続き「伊賀の忍者」の話しを。伊賀忍者を一躍有名にしたのは、「神君伊賀越え」である。天正10年(1582年)6月2日、明智光秀が京都本能寺に宿泊していた織田信長を襲撃し、信長が自害し果てる「本能寺の変」が起きる。堺にいた徳川家康は急いで本拠地・愛知県岡崎に帰ろうとした。その際、東海道を通ったのでは見つかるので、あえて歩行困難な甲賀・伊賀の山中を通るルートを選んだ。これがいわゆる「神君伊賀越え」である。家康は京都からやって来た茶屋四郎次郎に、河内国飯盛山付近で信長が没したことを知り、山城国宇治田原、近江国甲賀小川、御斎峠(おとぎとうげ)、伊賀国柘植、加太峠、そして伊勢国白子(現・鈴鹿市白子)で乗船し、三河国大浜(現・愛知県碧南市)に上陸して岡崎城へ帰還した。(ルートには諸説有)

家康の随行者は34名余りで、道中で甲賀衆・伊賀衆に守られて命からがら無事帰り着いた。しかし武田氏の旧臣・穴山梅雪は、一行より少し遅れたため土民(農民)に殺害される。伊勢路まで供をした者を直参に取り立て、途中鹿伏兎(かぶと・加太)峠越えで引き返した者200人は、尾張鳴海で召し抱え同心に取り立てた。そして服部半蔵に江戸城警備をあたせた。甲賀者も直参・与力・同心として江戸城下に住まわせた。江戸城(現・皇居)半蔵門は、門外に半蔵の屋敷があり命名。服部家の部下が組屋敷を構え、四谷へと通じる甲州街道(現在の国道20号、通称麴町大通り・新宿通り)沿い一帯が旗本屋敷で固められた。

伊賀と甲賀は2017年4月、「忍びの里 伊賀・

甲賀」として日本遺産に認定。海外では「NINJA(忍者)」と表記され、米国の「燃えよNINJA」は、ショー・コスギ主演のアメリカ映画。ミュータント・ニンジャ・タートルズは、テレビアニメから劇場版実写映画まで大ヒット。アメリカにおけるニンジャブームの先駆けとなり、後に颯爽と走るバイクの商品名「カワサキ・Ninja」のネーミングに影響した。忍者の忍は忍耐の忍、堪忍の忍と言われ、耐え忍びながらも密かに計画を進める生き方を、「忍者の聖地 伊賀」を世界に発信して欲しい。

また黒装束は、歌舞伎などの黒子のように「見えない存在」を表わした物であったが後に、その格好で活動していたと誤認された。現存する「忍者着」は、柿色系統の柿渋色やクシ色で安価に製造でき、元々は甲賀や伊賀地方で使われていた山着、野良着が元である。

忍者の実像は「伊賀衆・甲賀衆」と呼ばれた「地侍」たち。江戸時代以前は「伊賀衆」、それ以降は「伊賀者(いがもの)」と呼ばれ、戦国時代には大きな力を持った大名が現れず、自らの地を自らの力で治める必要から自治が発達し、お互いに連携して地域を守っていた。地侍たちは一国、一郡規模で連合し、支配層が結びついた統治共同体(一揆・ゆい-結)を形成。その自治組織を「伊賀惣国一揆(いがそうこくいっき)」と呼び、結束力が強く仲が良かった。「一味同心」に団結し、「諸事談合・寄合(よりのあひ)」して、時には多数決で物事を決めた。「みんなで集まり、話し合いで決める」仲良きことが、忍者の里の「掟(おきて)」である。



今回より、「赤目のむかし話」をシリーズでお届けしたいと思います。子どもの頃から馴染み深い昔話は、もともとは生活の中から生まれ、口コミによって広がってきた口承文学です。また、それらは貴重な民俗資料として、注目されています。

「むかしむかしあるところに…」と聞くと、ちょっとワクワクする気持ちになったことでしょうか。皆さんもぜひ、「むかしむかし赤目というところに…」と置き換えて、我が町、赤目のファンタジーを、もう一度楽しんで頂きたいと思います。

「赤い目の牛に乗った不動明王(長坂区・滝)」

今から約1200年もむかしのことじゃ。厳しい修行をする修験道を始めたと言われている役(えんの)小角(おすね)が、赤目の滝の山に入って修行しておいたらな、牛に乗った不動明王がやって来た。顔は色黒く、大きな恐ろしい目をして口に二本の鋭いきば、右手に降魔の剣をかざしとった。乗っている牛といったら炎のように赤い目をしていたそうや。不動明王は、しばらく役小角の修業をじっと見ていたんやけどな、そのうち姿を消してしまったそうや。役小角は、この地を不動明王が住む霊地に違いないと感づき、黄竜山(後の延寿院)という立派な寺を建てたんやと。

赤目の地名は、赤い目の牛が不動明王を乗せてやって来たところから名づけられてな、赤目滝と呼ば

れているんやと。役小角が修行していた妙法山は、滝の入り口近くに鋭くそびえ立っている山でな、山頂には文字を刻んだ大岩がいくつかあって、中にお経が納められているといわれているんやわ。〈話・赤目滝のお年寄りより〉

「送りオオカミ(星川区)」

むかしむかしのことやつた。中村(箕曲中村)と相楽と青蓮寺と星川の四村の境界になる四つ辻の真ん中でな。身元不明の一人の旅人が行き倒れておったのや。四村のうち三村の人は、死人を嫌って押し付け合いをしていたんや。「それじゃ、おれたちの村で葬ってあげることにするわ。」見かねた星川の人々が申し出てな。そして、旅人を埋葬したのや。それから霊に飲食物を供えてお経をあげる施餓鬼(せがき)というのが始まったのや。それからな。夜遅く星川からこの四つ辻を通過して出かける時には、送りおおかみがついて守ってくれることになったのや。また、よそから星川へ四つ辻を通過して帰る時には、迎えオオカミがついて守ってくれるのや。この送りオオカミと迎えオオカミは、四つ辻で死んだ旅人と伝えられているのや。このオオカミの姿はな。人の目には見えないといわれているのや。〈話・宮下修さん 明治36(1903)年生まれ〉

(平成25年発行「赤目のむかし話」より原文ママ) 以上の2作をご紹介します。次号もお楽しみに。



第二作は、赤目のシンボル「竜神山」と水に関わるお話を。

竜神さんの由来(柏原区)

今から150年ほどむかしの元治元(1864)年頃、村に青山源治と云う人がおってな。魚を仕入れてきて、それを売る商売をやっていたのや。この源治は、1日に20里(約80キロメートル)も歩く脚力の持ち主であってな。ある日のことや。源治はいつものように脚力にものをいわせて伊勢の浜へ魚を仕入れに行った際にな。ついでにお伊勢さんにお参りに行ったんや。このとき、神社に敷かれている白石が、あまりにも白光大りして美しかったもんで、そと一つ、魚を入れる箱の中へ入れて持ち帰ることにしたのや。帰る途中、青山峠で一休みしたんや。「どれ、石はどうか。」なんと色石であったはずが、白へびであったんやから驚きったらありゃあせん。「白石が白へびに変わるとは、まことに不思議なことだわい。」そのままふたをして、急いで村に帰ってな。ふたをとって見ると、今度は白石のままであったのや。あまりの不思議さに源治は、名主五人組に相談したんや。「不思議な石じゃ。この石はへびの化身かも知れんの。へびは雨を呼ぶということやさい、まつろうやないか。」ということになって白石を竜神として、山の峰にまつたのや。それ以来、干ば

つになったら、山の峰で火をたくことにしたんや。すると、雨が降ったんや。〈話・三村相之助さん 明治32(1899)年生まれ〉

七つ池(星川)

昔々、星川は、川が少なくて田んぼに引く水がとても不足してたんですわ。村人たちは二十四か所に田んぼを造らなあかんので、寄り合いを開いて相談。よい案は浮かばへんかったんやけど、一人がため池を造ろうと言い出し、これには村人たちも大賛成。けど、一つや二つとちがうので、すぐ造れるわけがあらへん。で、畑仕事の合い間に仕事をするにしましたんじゃ。多くの田、畑を掘って少しずつ池を造り始めたんやけどこの事業は、裕福でなかった村人にとって、たやすいことではのうてな。若い衆はもちろんのこと、年寄りや子供までも一緒になって、一日も休むことなく池造りに励み、とうとう七つ池が完成したんや。

七つのうち四つは「お池」「さら池」「うやま池」「丸池」と呼ばれ、二十四の田んぼに豊富な水を与えるようになったんや。そして七つ池は一年中水を涸らすことがなく、田に水を引くことができるようになったんですわ。〈話・宮下修さん明治36(1903)年生まれ〉 農山村地域では、稲作に水は不可欠な存在、まさに水は昔から生命の泉です。



第三作は、赤目の各地域・地区に関わるお話を。

檀の弁天さん（檀）

役小角（えんのおづぬ）が赤目滝の山で修行しておったときのことじゃ。赤目一帯は日でもり続きで農作物がとれず、村人たちは大そう困っておったそう。小角は何とか助けてやりたいと思ってな、山を下り高善山（竜神山）のふもとにけがれの無い清浄の地を捜して草庵を建て、七重の、ひときわ高い『檀』を造ってお祈りをしたそう。

すると高善山の東のふもとを流れている小川の岩の上に「明星の王子」が降り立った。

「役小角よ。お前の修法は立派である。村民の苦しみを救おうとするその心意気に秘法をさすけようぞ。」小角は不思議な力を与えられてな、五十七日間の修行をつんだあと、また不思議なことがおこったそう。紫の雲に乗った弁天さんが役小角の前に降りて来て「密呪秘印」を伝え、また雲に乗って姿を消した。

そんなことがあって次の年は農作物にとってちょうど良い時に雨が降り、かつてないほどの大豊作になった。村人たちはたいへんな喜びようで、小角に感謝するとともに弁天さまのおかげでやと考えた。そこで、小角が祈っていた檀の東方の丘の印之木山に弁財天女をおまつりすることになったんやわ。毎年二月六日の祭りには、やく払いの人々や店も出て大変なにぎわいじゃったがいつしか等身大の「弁天さん」は行方知れずになってしもうた。

役小角が七重の檀を設けた土地は「檀」、星の天

子が川に降りたことからその辺りを「星川」というようになったんやと。〈話・桐本一男さん 大正1(1912)年生まれ〉

うみ石（柏原）

昔、柏原に「九兵衛」という人が住んでおった。毎月一度、はるばると伊勢神宮まで歩いて参っていたそうやわ。ところがな、そのうち年老いてきたので歩いて行くことがえらくなってしもうた。そこで、最後のお参りの時、伊勢神宮の宮司に頼んだそうや。

「月参りももうこの年では足がいうことを聞いてくれまへん。お伊勢はんの石を一つだけもらえまへんやろか。」真剣に頼む九兵衛に宮司は、「石を持って帰ってどうなさるのじゃ。」不思議そうにたずねた。「へい、その石をお伊勢はんとして、毎日おがみますのや。」「なるほど…。おまえさまが気に入った。石を持って帰りなされ。」宮司はこころよく承知してくれたので、九兵衛は境内の白い丸い小石を持ち帰ってきましたんや。

その日から、九兵衛は小石を毎日のようにおがんでいたそうやが、ある日、石が持ち帰ってきた時より大きくなっていることに気づいてびっくりした。「もしかしたらこの石、生きてるとちゃうやろか。」九兵衛は首をかしげるばかり。それからも石はな、どんどん大きくなっていったそう。今では、その大きくなった石をこの村の勝手神社に納めてあるんやわ。〈話・久保義一さん 明治41(1908)年生まれ〉



今回のむかし話は、「伊賀一ノ井の松明講」の二月堂松明調進のいわれについて。

道観長者（一ノ井・香落峽）

今から八百年ほど昔、赤目町一ノ井に伊賀の国で一番の大金持ち「道観長者」が豪壮な館を構えて住んでいた。九つの郷を治め、農民を虫けらのように働かせ、自分は酒と女におぼれ、それはたいへんな乱れようだった。

長者には三男一女があったが、長男の「左門」と二男の「梅若」は病死。奥方の「小満」は体がくさる病にかかってしまった。このため一族は村外追放を御上から命ぜられ、人里離れた香落峽の八幡山のふもとに移り住み「八幡長者」と呼ばれるようになった。

三男の「小太郎」はその頃十三歳。母の病気を治すために「熊野権現」や「伊勢若宮八幡」へ月参りを続け、長者もそのうち過去を深く反省するようになった。そしてある日、長者は自分の財産を世のために使おうと決心。まず、島ヶ原の広国寺を再建、正月堂と名づけ、平家に焼かれた奈良・東大寺の復興に努めた。この頃、若狭の「南無観長者」と出会い、意気投合。二月堂を再建し、開基の「実忠（じっちゅう）上人」にならってその檀家に入り「わが私有地を二月堂に寄進し、松明を毎年二月堂の修二

会（しゅにえ）に納めるのだ」の遺言を残し、入寂（僧が死ぬこと）してしまった。

残された小太郎らが寂しく暮らしていたある日、盗っ人の「お竜」が財宝目当てに忍び込み、小満や姉の「時姫」らを次々に殺してしまい、なお、小太郎に迫った。「欲しがっている宝物はあの高い岩山に埋めてあります。案内しましょう。」

小太郎は逆にお竜をだまし、目もくらむ断崖絶壁の山に連れていった。欲に目がくらんで、財宝のことばかりを考えていたお竜を突き落とし、母や姉ら家族のかたきを討った。その岩山は「小太郎の賊落とし」と呼ばれ、いつしか「小太郎落とし」に変わった。

小太郎はその後、一族をとむらうために岩山にお経を埋め、奈良へ出て「聖玄」という立派なお坊さんになったと伝えられている。奈良のお水とりの時、一ノ井では松明を作り、二月堂に奉納しているが、これは道観長者の遺言で始められたと言われている。「伊賀一ノ井の松明送りと伝説」から。

伊賀一ノ井松明講に受け継がれた松明調進も復興してから、今年で775年を迎える。道観長者の遺言・悲願が形となって後世に、名張市の「無形民俗文化財」として、その想いの灯し火が未永く受け継がれていって欲しいものです。



第五作は、赤目の昔話が全国ネットのテレビで放映されたお話を。

風呂に入るお地蔵さん(丈六区)

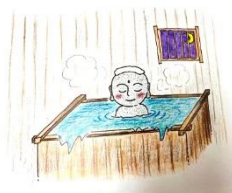
昔、赤目の丈六の道ばたに、お地蔵さんがひとつあったそう。ある夜、村人がお地蔵さんの前を通りかかったら、どういうわけか、お地蔵さんがおらんようになってしまった。「ありゃあ、おかしいぞ。確かにここにあったんじゃがなあ。不思議なことじゃのう。」

あわててあたりを見回したが、どこにも見当たらんかった。村人は、これはえらいことやとあわてて隣の家へ駆け込んで「おい、えらいこっちゃ、地蔵さまがおらんようになってしまった。」「そんなばかなことがあるもんか。石で出来てる地蔵さまがひとりで歩いてどこかへ行ったとでも、いうんか。ワッハッハ。笑わずでないよ。」隣りの人は最初相手にしなかったんやが、疑いながらも念のため一緒に道に出て見ると、いなかったはずのお地蔵さんがちゃーんとおるではないか。「なんじゃあ、いるやないか。お前さん。どうかしとるよ。」「いやあ、さっきは絶対いなかったんじゃよ。ほんまに不思議なことやのう。」「お前さん、キツネに化かされたんじゃないのかい。」「いや、絶対そんなことはねエよ…。わしが見た時はなかったんじゃ…」二人はキツネにつままれたような思いで帰って行ったのじゃった。そんなことがあったとき、近くのお茶屋さんの家では、夜になると決って、「こんばんは。すんまへんけどちょっと風呂に入らせてもらえまへんやろか。」知らない人が訪ねて来るという不思議な事が起こっておっての。このお茶屋の家というのはそりゃあもうたいそう気のいい人たち。お風呂

をもらいにくる人に、「どちらさんか存じませんが、どうぞ風呂に入ってだあこ。」気持ちよくすすめとったのじゃ。それからというものだんだんとこの二つの不思議な話が、村中に広まっていったそう。 (中略)

石で出来たお地蔵さんの足が、手が、見る見るうちに動き、だんだんその動きも大きくなっていったそう。そしてとうとうゆっくり、ゆっくりと歩き始めたんじゃ。歩いているうちに、少しずつ、少しずつ、人間の姿に変わっていくではないか。これを見ていた村人はただ、ただビックリ。驚きながらもお地蔵さんのあとをつけて行った。しばらくつくと、お地蔵さんはいつものお茶屋さんの前で立ち止まり戸をトントン。「こんばんは。すんまへんけど、お風呂に入らせてもらえまへんやろか。」声をかけると、すぐにお茶屋さんへ入って行ってしまった。翌朝、うわさはたちまち広がり、お地蔵さんが人間に化けてお茶屋さんの家へお風呂をもらいに行くということが、知れわたった。ひとつこの眼で見たいものだとあくる晩、お地蔵さんの前はいっぱいの人だかり。するとどうしたことが、動く気配すら見せん。その夜からお茶屋さんに来なくなってしまったそう。

それからしばらくたって、石の地蔵とは知らずお風呂を使わせてあげていたお茶屋さんは、みるみる大金持ちになり、家族みんなが長生きしたそう。嫁さんも来て幸せに暮らしたとかで、村人たちは、そのお地蔵さんを大事に大事におまつりし、「福寿延命縁結地蔵」いうて、今もお参りしていますとさ。〈 話・椋本孝さん 明治 41(1908) 年生まれ・青山守さん 大正 4(1915) 年生まれ〉



赤目の昔話は、少しお休みを頂いて、好評で要望の多い伊賀にゆかりある人や史実の歴史散策を。

まずは、「つれづれなるまゝに、日くらし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書き付くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。(原文)」で知られる『徒然草(つれづれぐさ)』は、旧青山町で書かれ、『つれづれ種(ぐさ)』と名付けられた鎌倉時代末期の随筆集で、『枕草子』『方丈記』と並び日本三大随筆のひとつ。

作者は、吉田兼好(よしだけんこう1283年(弘安6年)~1352年(文和元年))・兼好法師(けんこうほうし)の名で知られるト部兼好(うらべかねよし)で、先祖が京都の吉田神社・神主の家で、後世、吉田兼好と言う。彼が48歳頃に、それまで書きためていた244もの散文をひとつにまとめたと考えられる。

その内容は、無常、求道、自然観、住環境、趣味、人間観察、人生訓、考証、逸話、滑稽談など多岐にわたり、見聞した同時代の話や書物から知り、聞いた故実や有職などを綴ったもので、鎌倉末期の社会の動きを知る歴史史料としても一級品。

この徒然草は、晩年に伊賀市種生国見の庵で書かれたとされる。国見山は、当時国見寺(草蒿寺)があり、その一室で兼好法師が徒然草の草稿を練り、また近くの庵で晩年を過ごしたとされる。兼好法師終焉の地として「兼好法師遺跡公園」内に地元の人々が誇りとする兼好塚がある。遺跡地は東西20m、南北30mの平坦な雑木林で、高さ1.2mの遺

跡碑が中央に建てられていて、碑の前に土石がすこし高く積み上げられ、これが兼好の塚と言われる。晩年をここで過ごし、そして生涯をとじたという伝承が土地の人に深く信じられています。

松尾芭蕉が敬愛していた兼好の晩年過ごした種生(たなお)国見山を弟子の服部土芳がその意思を継いで訪ね、あたり一面草むらで兼好の遺跡らしきものは何もなく、その情景を「月添いて 悲しさこぼる 萩すすき」と詠んでいます。また傍には兼好の句「ありとだに ひとにしられて身の程や みそかにちかき 有明の月」の碑もある。

『花は盛りに』から始まる『徒然草』第137段には、「花は満開の時のみを、月は雲がない状態の時のみを見るものではない。降っている雨を見て思いを馳せる月や、今にも咲きそうな梢(こすえ・樹木の先の部分)、花が散ってしまったあとの庭などにこそ、しみじみとした趣深さがある」と記されており、彼の風流さがうかがえる。

また、達筆であったことでも知られ、当時から文化人として名高い人でした。しかし自分の才を誇ることはしませんでした。世捨て人としての暮らしの中で、名誉よりも自分の心が豊かであることがずっと大切であると気づいていた。そのためか、残した随筆集は死後しばらく埋もれていたが、250年以上もの時を経た江戸時代に大流行し、世に広まることに。さらに時を経た現代もなお、その生き方は多くの人の共感を呼び、兼好が著した『徒然草』は、人生訓として人々に親しまれています。



今から 400 年前の話、名張の武将と言えば、藤堂高虎（たかとら）・高吉（たかよし）親子です。父の高虎は、慶長 13 年（1608 年）に伊賀上野藩主・筒井定次の改易に伴い、伊賀国内 10 万石、並びに伊勢安濃郡・一志郡内 10 万石、飛び地四国の今治城周辺 2 万石の計 22 万石に加増され、津藩主となった。1 万石は、ほぼ 200～300 人の兵力、22 万石は今の大企業並みの規模。そして、一万石の領地とは、一万石の米が収穫できる面積の土地と領民を意味する。

藤堂高虎は、黒田官兵衛（孝高）、加藤清正と並び、「築城三人」の一人とされる。多くの築城を担当し、層塔式天守を考案。伊賀上野城など高石垣の技術を始め、石垣上に多聞櫓（やぐら）を巡らす築城では、第一人者。また外様大名で、主君を七度も替えながら徳川家康の側近として幕閣に匹敵する実力を持つ、異能の武将でもあった。

名張藤堂家は、藤堂高虎の養子高吉にはじまる。高吉は、織田信長の重臣丹羽長秀の三男で、天正 7 年（1579）近江佐和山城に生まれ、幼名は仙丸（せんまる）。豊臣秀吉の所望により、弟羽柴秀長の養子と。その後また秀吉の戦略として、高虎に子どもが無かった為、高虎の養子となり、名を高吉（たかよし）と改めた。戦国大名にとって、長男・次男・三男までが後継ぎで、四男以降は、分家して嫡男（ちやくなん）の家来に、または養子に出すか、人質になるのが通例。

高吉は、朝鮮出兵・関ヶ原での活躍に加え、大坂夏の陣では長宗我部盛親隊を相手に、高虎を死地から救い出す。関ヶ原の翌年、慶長 6 年（1601）に

藤堂家に念願の男児・高次（たかつぐ）が誕生。寛永 12 年（1635）江戸幕府より伊予と伊勢国内 2 万石との替地の命がでると、藩主高次（高虎の嫡男、伊勢津藩第 2 代目、高吉の 22 歳下）により、高吉は伊勢 2 万石の内 5 千石を名張周辺と替地し、翌寛永 13 年（1636）名張に移封され、名張藤堂家の祖となる。名張藤堂家は代々宮内（くない・宮中）の官職にあり、藤堂宮内家と呼ばれた。

高次は高吉の存在を危険視し、名張移封も高吉に対する冷遇の一環。その後、名張藤堂家と津本家との対立は続いた（名張騒動など）。名張藤堂家の慣習、当主を「殿様」と呼ぶのも禁じられた。第 8 代藤堂長教（ながなり）が津藩本家から奥方を迎えて以降、改善するが、遠祖である丹羽家色や独立気風も薄れた。名張藩主は第 9 代の藤堂長徳（ながのり）まで、藤堂氏の通字である「高」ではなく、丹羽氏の「長」を使用、そして第 11 代高節（たかもち）で明治維新をむかえた。

名張藤堂家・高吉は、家臣や伊予から商人、職人らを従え、名張の高台・旧領主筒井氏の跡地に陣屋（じんや）を構え、今の名張発展の基礎を築き、治水工事にも取組む。高吉は、寛文 10 年（1670）大往生で 92 歳の生涯を名張で終えた。墓所は徳蓮院（平尾）。なお「名張藤堂家邸跡」は、上級武士の屋敷として、生活の場の中奥部分が残し、全国的にも貴重な存在（三重県文化財）。藤堂高吉は、戦国を生き抜き、名家の生まれで才覚に優れたが故に不遇の人生。しかし人望があり忍耐と人間力に優れたお殿様は、名張の誇りと云っても過言ではない。



赤目のむかし話の復活です。第六作よりは、動物のでてくるお話を。

キツネの通り道(柏原区)

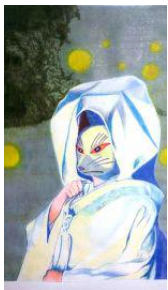
星川のキラウというところに、キツネがすんでいたのや。そのキツネは、人でいえば十七、八の年頃の娘であったんや。ある日のこと、キツネが鹿高の地へお嫁に行くことになってな。その日は、お日様がまぶしく照っていたんやが、雨が降っていたのや。その後も星川から鹿高へお嫁に行くキツネがたくさんいたのや。そんな日に限って、天気の良いのに雨が降っているんやった。そんなことがあってから、天気の良いのに雨が降っていると、村人は「キツネの嫁入りや。」と言うようになったのや。

キツネが通る道は、柏原の西の坂を下って、檀の愛宕の辻から丈六に出て、それから鹿高へ行ったそうや。

〈話・森嶋茂さん 大正2(1913)年生まれ〉

キツネに化かされた話(柏原区)

赤目の柏原と星川に挟まれた檀の横山でよく出てくる「横山キツネ」のことや。暗い雨の夜、村の一人が星川を通過の帰り、横山の道を通っていると、パラパラと雨傘に小石を投げられた。堤灯の火が風もないのにプツと消された。いくら火をつけてもまた消される。ふと見ると前に美しい女の人が通っていたので、ついて行くと、うしろに尾っぽがあるのが見えた。



第七作は、キツネの話に続きトンビと蚊・虫のお話を。

トンビの親子(檀区)

むかし、むかし、赤目の山奥に、母さんと男の子のトンビが住んでいたのや。男の子は、大変な親不孝な子どもで、母さんの言うことを少しも聞かなかったのや。ある日のこと。母さんが「これから、エサを探しに行ってくるから、おとなしく留守番をしているのですよ。」と、言って出かけたんや。ところが、男の子は、留守番をしないで、近くに住んでいるタカの子の尾ンボを抜いたり、ハトの子の頭をつつついたりして泣かせてばかりのいたずらっ子ぶりをしていたのや。

また、ある日、母さんが疲れたので、「今日は、お休みですから、静かにしてなさい。」と、言っても、男の子は「今日は、おなかが空いた。エサが欲しい、お腹が空いた。」と、羽根をバタバタさせて、だだをこねるばかりやった。「仕方のない子ね。それじゃ、山へエサを探しに一緒に行きましょうか。」「いやじゃ。川へ行きたい。」「そう。じゃ、川へ行きましょう。」「ううん、山じゃ。」男の子は、母さんに逆らって、反対のことばかり言うのであったんや。

このような親子の毎日が続いて、母さんは、疲れてしまい、とうとう重い病気になってしもうたんや。そして、枕元に男の子を呼んで、「母さんは、もう死ぬかも知れない。もし死んだら、母さんを川に埋めておくれ。」と、言ったのや。これは、いつも親

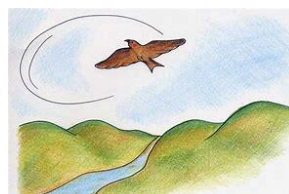
不孝な子だから、川に埋めて欲しいと言えば、きつと山に埋めてくれるやろう、と思って言うたのや。それから数日後、残していく男の子のことばかりを考えながら、母さんは、死んでしまったんや。男の子は、悲しんで、「母さん、ぼくは母さんに逆らっただけで、言うことを聞かんかった。これから、母さんの言うことを聞きます。」と、自分の親不孝を後悔して、一晩中、泣いていたんや。そして、次の日、死んだ母さんを川に埋めたんや。今でも、雨が降る前になったら、トンビは川の上をグルグル回りながら「ピーヒョロロ、ピーヒョウロロ」と、鳴いているやろ。あれは、雨が降ったら、川が増水して埋めた母さんが、流されないかと、心配している姿なのや。

赤目地方では親不孝な子どもを「トンビの子ども」と言っているのや。〈話・松山一郎さん 昭和3(1928)年生まれ〉

蚊の口行事(相楽区)

むかし、相楽では、旧正月の十三夜、村中の人々が宮さんの拝殿でもあった会議所に集まった。そこで、その大広間の片隅につくられていた囲炉裏(イロリ)のぐるりに座って、それぞれが持ち寄った餅を競い合うように、「蚊の口」、「ブトの口」、「シラミの口」、「ハミの口」などと、一つ口を唱えるごとに、火の中に放りこんでは、来るべき夏のうるさい害虫どもを焼き殺すマジナイをしたものや。

〈話・中西金之亮さん 明治30(1897)年生まれ〉



伊賀忍者とオオサンショウウオ(赤目滝)

伊賀竜忍法を編み出した百地三太夫の弟子赤岩伊助は、赤目渓谷で忍法の修業を重ねていた一人であった。川の魚や山菜をとって常食とし、厳しい訓練をしていたのである。

ある日、沢蟹を獲ろうと川の石を動かしていると、イモリに似た大きな生き物が出てきた。「わあ、気味の悪い怪物だ。何だろう。」と、不思議に思って肌にさわってみると、意外におとなしく、いっこうに動かない。計ってみると、三尺（約90cm）余りある。「よし、これはよい友ができた。飼ってみよう。」伊助は早速、川の隅に池を作り、竹を編んでふたをして、住まいを作ってやった。今までに一人で淋しかったが、友を得て一層修行に身が入るようになった。餌には、自分の食糧を分けてやり、すっかり馴れて、語り合うようにもなった。こうして伊助は、オオサンショウウオと共に何年か忍法の修行を続けていたが、その内に、オオサンショウウオの生態と忍者の特色がよく似ていることを知った。

伊助はオオサンショウウオのようになるまで修行すれば、一人前の忍者になれるんだ、と訓練を続けた。長年の修行を終えて帰るとき、伊助はオオサンショウウオも一緒に連れて帰ることにした。

帰って百地三太夫にそれを見せると、「これはハジックイと言って、あの川にたくさん生息している動物で、私も修行中、この動物をよく飼育したものだ。」と言う。伊助が、修行中このオオサンショウウオに教えられたということ話をすると「その通りだ伊助。しかし、このハジックイのようになるのは大変難しいことなんだよ。」と聞かされました。その後、伊助は、名残惜しみながら、長年友として暮ら

してきたオオサンショウウオを竜口川に放してやった。このオオサンショウウオの棲んでいる所は「サンショウ谷」伊助が修行していた所を赤岩と名付けられた。〈話・滝のお年寄り〉

ガワロとハナタカの好物（柏原）

むかしからきゅうりは、川へ流すのやでと教えられてきたが、そのわけについてはのう、このようなことなのや。むかしのこと、一人で川へ行ったら「ガワロ（かっぱ）に足を引っ張られるぞ」と、家の人によく言われたものや。ガワロは、川の底に棲んでいて、川に泳ぎに来た子どもの足をとる動物といわれきゅうりを好むという。そのために、初なりきゅうりは、食べずに必ずガワロにやるために川へ捨てるのだと教えられた。

また、深い山や岩がある山へ一人で山仕事に行くときは、「うかうかしていたら、ハナタカ（鼻高＝天狗）さんに放り投げられるぞ」と注意をうけた。一人で深い山に登って、仕事していると落ちたりすることもあったのや。そんなときには「その山のハナタカのしわざや」といって、むかしの村人らに信じられていたのや。

天狗というのは、高い鼻をして目は鋭く、赤い顔をした仙人という思いがあって、これが出てきて人を隠したり、投げ飛ばしたりするのだと恐れられていた。しかも、その正体は見た者がいない。天狗は赤いものが好きで、その赤い物を食べているから天狗は、赤い顔をしているのやと。山へ持って行く弁当にも、小豆で炊いた赤飯や梅干しなんかを入れなかった。それは、天狗に食べられてしまうからだといわれていたのや。〈話・富森盛一さん 明治28(1985)年生まれ『柏原昔話』著〉



勝運生地蔵(しょうけいじそう) さん(丈六)

「おばーちゃん、おばーちゃん。おばーちゃんの足痛そうやな。おばあちゃんの痛い足、なおしてあげるわ。おばあちゃんは足痛いさかいに、かまへんでな、うちの人に四日間だけ参ってもらったらええんやわ。」

おばあちゃんの枕元に、地蔵さんが現れていったのですや。この地蔵さん、どこかで見覚えがあるのや。「さあて、どこの地蔵さんやろかな。」と考えたのやが、その夜は、思い出せなかったのや。おばあさんの足は、二、三日前から痛くて、立つこともできなかったのや。このまま床についたきりになると思い込んでいたのや。翌日、目が覚めたら、枕元に現れた地蔵さんは、もういなかった。「わしや、夢を見ていたのかいな。それにしても、不思議な夢やったなあ。」おばあさんは、少し気になったのやが、相変わらず、足がうずいて痛くてしょうがなかったな。その夜、昨夜のお地蔵さんがまた現れてな。(中略)

翌日、目が覚めてから、おじいさんに夢に出てきたお地蔵さんの話をしたのやわ。「それは、きっと丈六橋の近くのショウケ(勝運生)地蔵さんやで。ショウケ地蔵さんやったら足をなおしてくれるはずや。」「そうかもしれへん。あの地蔵さんは、どこかで見た覚えがあると思ってたんやが、ショウケ地蔵さんやったんやわ」おじいさんは、さっそくショウケ地蔵さんにお参りに行くことにしたのや。そして、長年連れ添ったおばあさんのためやと、毎日お参りにいったのや。すると、四日目の朝になったら、足の痛みが大分なくなってしもうた。そして五日目の朝になったら、足の痛みがすっかりなくなってしもうて、元気に歩けるようになってしもうた。諦めていた足がなおったので、嬉

しくてしょうがなかった。「おばあさんや。よかったのう。地蔵さんがほんまになおしてくれるなんて…」おじいさんは、半信半疑で参っていたらしく、おばあさん以上にびっくりしたのや。「元気になったら、お礼にわらじをお供えせなあかんのう。」と言って、わらじを作ってな。二人でお供えに行きましたのやわ。

この勝運生地蔵さんはショウブイケの地蔵とも呼ばれておりましてな。村人が仲良く平和に暮らせるように願って、むかしに建てられたそうやわ。それが不思議なことに、足の病気をなおしてもらった人がたくさんでな。その話が広まって遠くからもやってきてな、地蔵さんと自分の足を交互に手でさわって、「どうか私の足が良くなりますように。」とか「どうぞうちのおじいちゃんの足がなおりますように。」と言ってお願いすればなおしてくれるのやわ。

また不思議なことに、勝運生地蔵さんが立っている付近の田は病虫害や鳥害も少なくてな。どこよりも米の収穫が多いそうや。これも勝運生地蔵さんのお蔭やと感謝し、家内円満、村人皆仲良く、互いに助け合い、健康で笑って暮らしておりましてな。それに村にはお笑会(おわらいかい)という会もあって、みな愉快地日々を送っておりますんや。この地蔵には顔がないのやが、むかし、かわいそうなことに、悪い侍に切られてしもうたといわれておりますんやわ。〈話・山村志へさん明治31(1898)年生まれ 藤森茂男さん明治31(1898)年生まれ〉

(平成25年発行「赤目のむかし話」より引用・写真提供 寺嶋喜代様)



赤目のむかし話は、少しお休みを頂いて、名張・伊賀にゆかりある人や史実の歴史散策を。そこで伊賀と云えば、やはりこの人、松尾芭蕉（まつお ばしょう）。

芭蕉さん（1644年（寛永21年）～ 1694年11月28日（元禄7年10月12日））は、江戸時代前期の俳諧師。幼名は金作。名は宗房（むねふさ）。俳号は初め実名宗房（そうぼう）を、次いで桃青（とうせい）、芭蕉（はせを）と改めた。13歳で父親を亡くし、藤堂家に出仕し侍大将・藤堂良忠と共に、京都の俳諧師・北村季吟の門下となる。地元では、親しみを込めて「芭蕉さん」と呼ぶ。

和歌の余興の言捨ての滑稽やユーモアを主とした俳諧を、蕉風と呼ばれる芸術性の高い句風として確立。後世では俳聖として世界的にも知られる日本史上最高の俳諧師に。但し芭蕉自身は発句（俳句）より俳諧（連句）を好んだ。

1689年5月16日（元禄2年3月27日）に弟子の河合曾良を伴い江戸を発ち、東北から北陸を経て美濃国大垣までを巡った紀行文『おくのほそ道』が特に有名。伊賀者（忍者）として藤堂家に仕えた無足人（準士分）であるとする説や、母が伊賀忍者の百地氏の血筋である説で、『おくのほそ道』は江戸幕府の命を受け隠密として東北諸藩の様子を調査する裏の目的が隠されていたとの解釈もある。

芭蕉さんは、伊賀国阿拝郡柘植郷の土豪一族出身の松尾与左衛門と妻・梅の次男として誕生。出生地も、阿拝郡の上野城下赤坂町（現在の伊賀市上野赤坂町）説と上柘植村（現在の伊賀市柘植町）説の2説がある。出生前後に上柘植村から赤坂町へ移転し、転居と芭蕉誕生のどちらが先だったかが不明。松尾家は農業を生

業としていたが、苗字を持つ家柄だった。

上野天神宮（菅原神社）は、芭蕉が、伊賀藤堂家に仕官していた武士の身分を捨て、俳諧で身を立てることを決意した1672年（寛文12年）に、自分の文運を祈願して「貝おほい（貝おほひ）」という作品集を奉納した神社としても有名。

1675年（延宝3年）に江戸に下り、神田上水の工事に携わった後は1678年（延宝6年）に宗匠となり、職業的な俳諧師となった。1680年（延宝8年）に深川に草庵を結び門人の季下から贈られた、芭蕉の木を一株植え、大いに茂ったので「芭蕉庵」と名付け、「芭蕉」の句を詠んだ。

伊賀上野には「芭蕉五庵」（無名庵・蓑虫庵・東麓庵・西麓庵・瓢竹庵）と呼ばれるゆかりの草庵がある。その中で唯一現存するのが蓑虫庵（みのむしあん）。庭内には、芭蕉堂や代表句「古池や 蛙飛こむ 水の音」をはじめとする句碑が並んでいる。和歌や連歌の世界では蛙の「鳴く」ところに注意が及ぶが、蛙の「飛ぶ」点に着目し、それを「動き」ではなく「静寂」を引き立てるために用いる詩情性は過去にない画期的な作品と称賛される。

平安後期の流浪の歌人西行（1118～1190年）に憧れ、『おくのほそ道』『更科紀行』『野ざらし紀行』『笈の小文』『鹿島詣』などの紀行文（旅日記）を残した。生涯で詠んだ発句は1000句以上。痔と疝痛の持病があったようで、下痢が原因の大腸炎で死去（50歳）。辞世の句、「旅に病んで 夢は枯野をかけ廻る」。芭蕉さんは、まさに伊賀出身の世界に誇れる偉人です。



荒木又右衛門は、1599年(慶長4年)～1638年(寛永15年)江戸初期の剣客。伊賀国荒木村出身で、剣を柳生十兵衛に学ぶ。仇討は1634年(寛永11年)義弟渡辺数馬を助け、伊賀上野の鍵屋の辻で弟源太夫の仇河合又五郎を討った実話。

曾我兄弟の仇討ちと赤穂浪士の討ち入りに並ぶ日本三大仇討の一つ「伊賀越仇討(鍵屋の辻の決闘)」で有名です。

又右衛門の本姓は服部氏で、伊賀国(三重県)服部郷荒木村生まれ。父の服部平左衛門は藤堂高虎に仕えて150石取りであったが、浪人してのち備前の池田忠雄に300石で仕えた。「伊賀越の仇討」は、講談などで「36人斬り」と脚色されているが、史実では河合側死者4人のうち、又右衛門が2人を斬った。1638年8月12日、数馬と共に鳥取藩に引きとられたが、16日目に40歳で没している。死因については毒殺など諸説ある。

1630年(寛永7年)7月11日、岡山藩主池田忠雄が寵愛する小姓の渡辺源太夫に藩士・河合又五郎が横恋慕して関係を迫るが、拒絶され又五郎は逆上して源太夫を殺害。又五郎は脱藩して江戸へ逐電、旗本の安藤次右衛門正珍にかくまわれた。激怒した忠雄は、幕府に又五郎の引渡しを要求するが、安藤次右衛門は旗本仲間と結託してこれを拒否し外様大名と旗本の面子をかけた争いに発展。1632年(寛永9年)、忠雄が疱瘡のため急死した。よほど無念だったのか死の間際に「読経よりも又五郎の首を墓前に供えよ」と、又五郎を討つように遺言を残した。源太夫の兄・渡辺数馬は仇討ちをせざるをえない立場に追い込まれた。

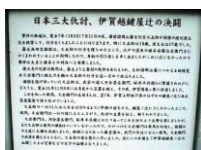
剣術が未熟な数馬は、姉婿の新陰流剣豪・郡山藩剣術指南役の荒木又右衛門に助太刀を依頼。数馬と

又右衛門は又五郎の行方を捜し回り、1634年11月に又五郎が奈良の旧郡山藩士の屋敷にいることを突き止める。又五郎は危険を察し、再び江戸へ逃れようと伊賀路を逃走、それを知り道中の鍵屋の辻で待ち伏せする。

又五郎一行は、叔父で元郡山藩剣術指南役河合甚左衛門、妹婿で槍の名人の桜井半兵衛などが護衛に付き、総勢11人。待ち伏せ側は数馬と又右衛門それに門弟の岩本孫右衛門、河合武右衛門の4人だけ。11月7日早朝、鍵屋の辻で待ち伏せを知らない又五郎一行に数馬、又右衛門らが切り込み、決闘が始まる。孫右衛門と武右衛門が馬上の桜井半兵衛と槍持ちに斬りつけ、半兵衛に槍を渡さない様にした。又右衛門は馬上の河合甚左衛門の足を斬り、落馬したところを切り伏せた。次いで、孫右衛門と武右衛門が相手をしていた桜井半兵衛を打ち倒す。このとき武右衛門が斬られて命を落としている。

又五郎側の多くは戦意を喪失し、逃げてしまう。逃げ遅れた又五郎は数馬、又右衛門らに取り囲まれ、剣術に慣れていない二人は、延々5時間もの斬り合いの末、やっと数馬が又五郎に傷を負わせたところで、又右衛門がとどめを刺した。見事本懐を遂げた数馬と又右衛門は世間の注目を集め、特に、実質仇討ちを主導した荒木又右衛門は賞賛を浴びた。

鍵屋の辻は、伊勢街道と奈良街道の分岐点「みぎいせみち ひだりなら道」と刻する1828年(文政11年)の道標があり、現在は「鍵屋の辻史跡公園」。園内には荒木又右衛門の遺品や錦絵などを展示した伊賀越資料館(休館中)や数馬茶屋(工事中)などがある。数馬茶屋は、1929年築の木造平屋の茶店。国文学者の羽仁新五が戦後まもなく文化活動の拠点とし、放送作家の永六輔、日本文学者のドナルド・キーンら多くの著名人が訪れた。



お地蔵さんのお話を。

全国にたくさんのお地蔵さんが有ります。夏になると各地域で行われる地蔵盆、どんな小さな集落の道にもあるお地蔵さんの石仏や、お墓やお寺にある六地蔵像、かさ地蔵の昔話など身近な存在。また赤目にも多くのお地蔵さんや石仏が残っています。勝運生地蔵(しょうけじそう)さんに続いて、3話を紹介。

大師山の子安地蔵(柏原)

柏原にある「大師山」のふもとに昔から「久保」という家がありましてな。七、八代前の方が同じ夢を何度も見たそう。白馬に乗ったお大師さまが山から降りてくる夢でしてな。お大師さまが、「大師山の塚を掘るんじゃ。大事なものが埋まっておる。分かったか。掘るのじゃぞ。」

一晩だけなら気にもとめなかったのに、毎晩や。不思議な夢のことが気になってしもうて、ある朝、村人と一緒に塚を掘ってみることにしたそうですわ。するとどうじゃ、そこからお地蔵さんが出てきたんやわ。何のお地蔵さんか分からへんでんけど「子安地蔵」と名付けられてな。その塚にまつられたそうや。

今でも、その地蔵のほこらを二十年に一回建て替えて、毎月二十四日を命日としてな、村の人がまつっておるのや。〈話・久保義一さん 明治四十一年(1908)年生まれ〉

久保神社の由来(柏原)

むかし、久保家の方が伊勢神宮に参ったときにな。

二見ヶ浦まで足を運んで、その興玉神社の横で、小石を一つ拾って帰ったのや。「ああ、えらかった。どれ石でも出そうかな。」ていって、小石を庭へ置いたんや。すると不思議なことに「おやおや石がだんだん大きくなっていく! こりゃあ、いったいどういうことじゃ。」びっくり仰天。置いたとたん小石は、みるみる大きくなって五貫三〇〇匁(約20キログラム)ほどにもなってしまったのや。そして、石を村の下東野という所にまつたんや。後に、勝手神社にまつられてな。

村人たちは、子どもを連れて、「どうか子どもが無事で立派に大きく育ちますように。」と云ってお参りしたものや。

〈話・三村相之助さん 明治三十二年(1899)年生まれ〉

丸尾山の歯痛地蔵(星川)

星川の南にポコンとした丸尾山があつてな。そこに古い塚があつて、お稲荷さんとお地蔵さんがまつられているんや。

そのお地蔵さんは、むかしから歯痛をなおしてくれるお地蔵さんでな。各地からお参りしてましたのや。初午さんには、当番の十人が村で米を集めて、お餅をついてな。丸尾山で餅まきをしたんやわ。

今では、その風習がなくなっていますが、お正月にお供えしておりますんや。

〈話・森嶋ます乃 明治四十一年(1908)年生まれ〉

